富山県

大島町荒畑遺跡

発掘調査概要

墨書土器

1991年 3 月

大島町教育委員会

写真1 遺跡の位置

例　　言

1.　本書は、昭和63年度に実施した大島町企業団地内大栄アルミ工業株式会社アルミ形材保管倉庫建設に先立つ荒畑遺跡の発掘調査概要である。

2.　発掘調査は、大栄アルミ工業株式会社の委託を受けて、大島町教育委員会が実施した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。

3.　調査期間は、昭和63年６月13日から６月16日までと、同年10月17日から10月21日までである。調査面積は300 ㎡である。遺物整理、概要書の作成は、平成元年度と２年度に実施した。

4.　調査参加者、事務担当は次のとおりである。

富山県埋蔵文化センター主任久々忠義、文化財保護主事安念幹倫（以上調査担当者）

地元宮脇正雄、田仲与三次、佐々木慎吾、佐々木粛子、橋本信子、花崎みよ、北本すい子、本林きみ

事務局は、社会教育課に置き、庶務は課員の協力を得て、北本宗則、園城安祐（63年度）、越前裕夫（２年度）が担当し、教育長長井正一が総括した。

5.　調査にあたっては、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターの指導を得た。また、調査から概要書の作成に至るまで、次の方々や機関から御指導・御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

大栄アルミ工業株式会社林和彦、新建築設計事務所山口充

富山考古学会西井龍儀、金沢経済大学藤井一二、早稲田大学金子浩昌

富山県埋蔵文化財センター邑本順亮、橋本正、岸本雅敏、狩野睦、酒井重洋、斎藤隆

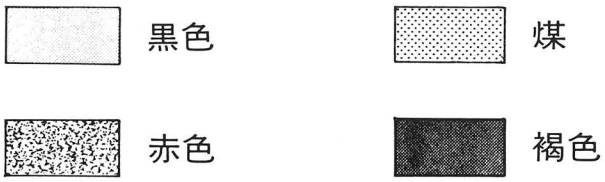
小矢部市教育委員会伊藤隆三

6.　概要書の作成は久々が行なった。

7.　木器は４点について保存処理を行なった。保存処理は、元興寺文化財研究所保存科学研究室へ委託した。

8.　遺跡の略記号は、町名と遺跡名のそれぞれの頭文字をとって「ＯＡ」とした。遺構の表記は通し番号の頭に溝の記号「ＳＤ」をつけた。

図中で用いたスクリーントーンの凡例は次のとおりである。



目　　次

Ⅰ．遺跡の環境……1
1　遺跡の立地……1
2　周辺の遺跡……1
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
Ⅱ．調査の概要……3
1　調査に至るまで……3
第２図　発掘調査区の位置……3
2　本調査……4
3　基本層序……4
第３図　試掘調査区と遺跡の範囲……4
写真２　調査風景……5
Ⅲ．遺構と遺物……6
1　遺構……6
第４図　遺構図……6
第５図　土層図……7
写真３　調査区近景……8
写真４　調査区近景……9
写真５　土層……10
2　遺物……11
弥生時代……11
第６図　弥生土器……11
奈良時代……11
第７図　須恵器杯……12
第８図　須恵器杯蓋、高台杯……13
第９図　須恵器瓶、壺、甕、高杯……14
第10図　土師器椀、蓋……15
第11図　土師器甕、鍋……16
表－１　須恵器杯観察表……17
第12図　瓦、土錘、円面硯……18
第13図　墨書土器(1)……19
表－２　墨書土器・箆書土器(1)……20
第14図　墨書土器(2)……20
表－３　墨書土器・箆書土器(2)……21
第15図　墨書土器(3)……21
第16図　木器……22
中世……23
第17図　中世の遺物……23
表－４　須恵器高台杯観察表……24
表－５　須恵器杯蓋観察表……24
表－６　土師器椀観察表……24
写真６　遺物出土状況……25
写真７　遺物出土状況……26
写真８　須恵器……27
写真９　須恵器・土師器……28
写真10　須恵器・土師器……29
写真11　瓦・硯……30
写真12　木器……31
写真13　墨書土器……32
写真14　墨書土器……33
写真15　中世の遺物・歯・鉄滓……34
Ⅳ．まとめ……35

Ⅰ．遺跡の環境

1．遺跡の立地（写真１．第１図）

荒畑遺跡は、大島町北高木と新湊市高木の２市町にまたがる縄文時代（後期・晩期）、弥生時代（中期・後期）、奈良時代、中世に及ぶ複合遺跡である。

遺跡は、標高２～３ｍの沖積平野に位置する。この平野は射水平野と呼ばれ、約6,000 年前（縄文時代前期）には今は富山新港となっている放生津潟が、射水丘陵の山ぎわまで広がる湖底であった。その後気候の寒冷化に伴い、神楽川、下条川、鍛治川などの諸河川によって砂や粘土が運ばれ、それが堆積して陸地化していった。しかし、平野のあちこちには小さな湖や沼地が残る湿地帯が広がっていた。ただ河川に沿った所では微高地が形成されていたようである。〔古岡1982〕

荒畑遺跡は、神楽川が形成した微高地に立地している。神楽川は今は射水丘陵の西側を流れる和田川が大門町円池で西流し庄川へ合流しているが、もとは和田川が北流し東神楽川と西神楽川の二つの流れとなって放生津潟へ注ぐ河川であった。舟運が重要な交通手段であった時代には、神楽川は人や物を運ぶ幹線道でもあったようである。古代においては、射水丘陵の中の小杉丸山遺跡で焼かれた瓦が高岡市伏木の御亭角遺跡で発見されているが、瓦はこの神楽川を通じて運ばれたと考えられている。また、室町・戦国時代には、射水・婦負両郡の守護代であった神保氏の城館である放生津城と増山城がこの神楽川によって結ばれているのである。

2．周辺の遺跡（第１図）

新湊市側の荒畑遺跡では、縄文時代後期（気屋式、約4,000 年前）の土器が出土している。神楽川流域では今のところ最も古い時期のものである。

弥生時代になると、大島町では八塚や鳥取、新湊市では高木、朴木、上牧野などで土器が出土している。中期からあるが、後期末葉から古墳時代初期のものが多い。

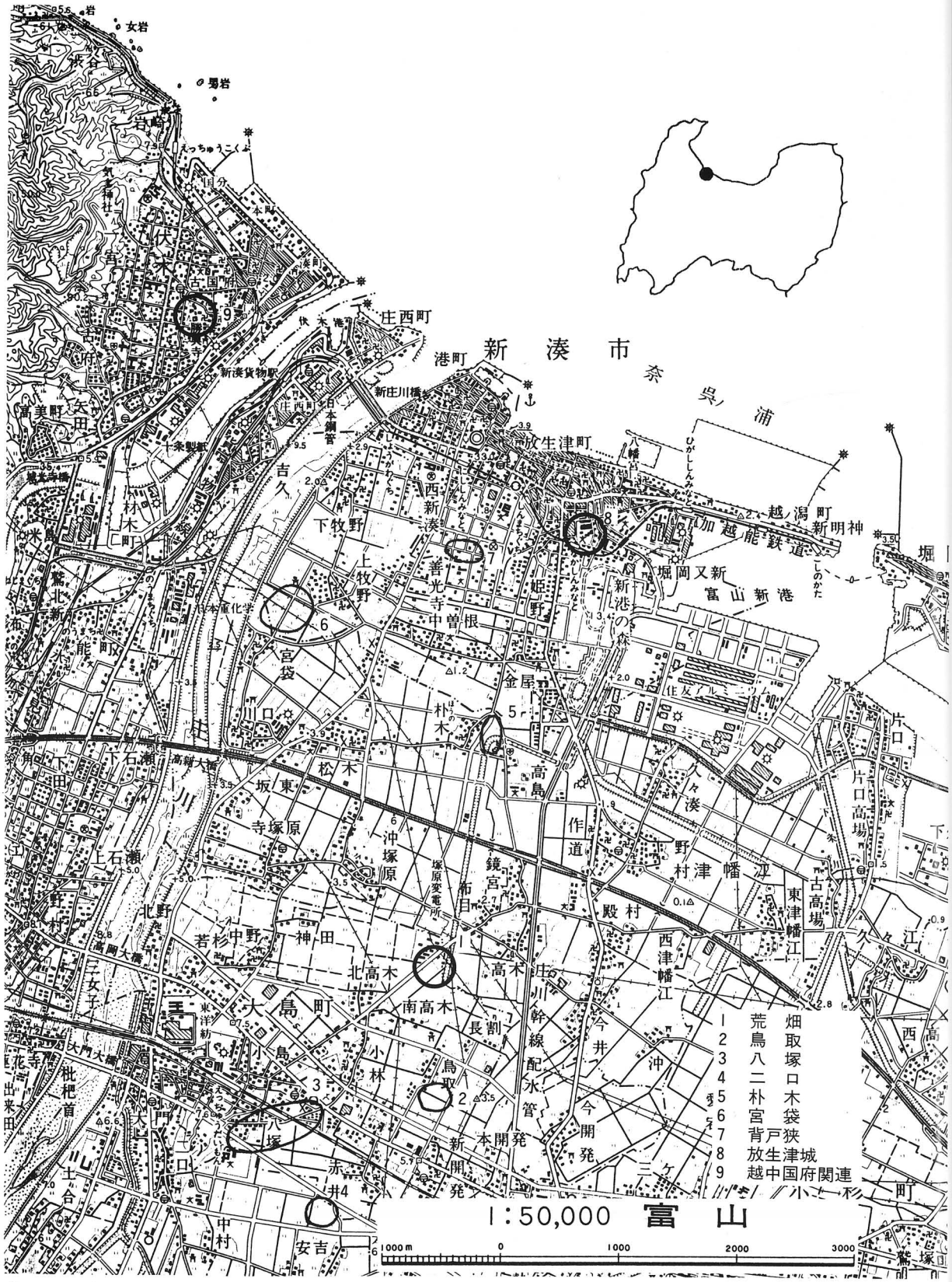
古墳時代では、八塚で６世紀代とみられる須恵器甕が出土している。

奈良～平安時代では、大門町二口、大島町荒畑、八塚、新湊市背戸狭などで須恵器、土師器が出土している。しかし、遺跡の性格など詳しい内容は不明である。

中世のものでは、大島町北高木地内の字五枚瀬町に寺田ノ山と呼ばれる径９ｍ高さ1.8 ｍの塚があったとされ、昭和30年に骨つぼと南北朝時代の五輪塔が出土したといわれる。円徳寺という寺の跡と伝えられている。その他に、鳥取、小林、八塚、赤井などの村々では南北朝から室町時代の五輪塔、宝筐印塔などが出土している。

文書資料をみると、万葉集に「三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ」と歌われている三島野が、この神楽川流域と考えられている。

鎌倉時代は、九条家領荘園東福寺領所東条保であるとされている。保はもとは国衙領であり、奈良時代には東大寺領荘園としてすでに開発が始まっていた可能性が指摘されている。東条保は南北朝時代の争乱により衰滅し、その後どうなったかについてはよくわかっていない。〔大島町1989〕



第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

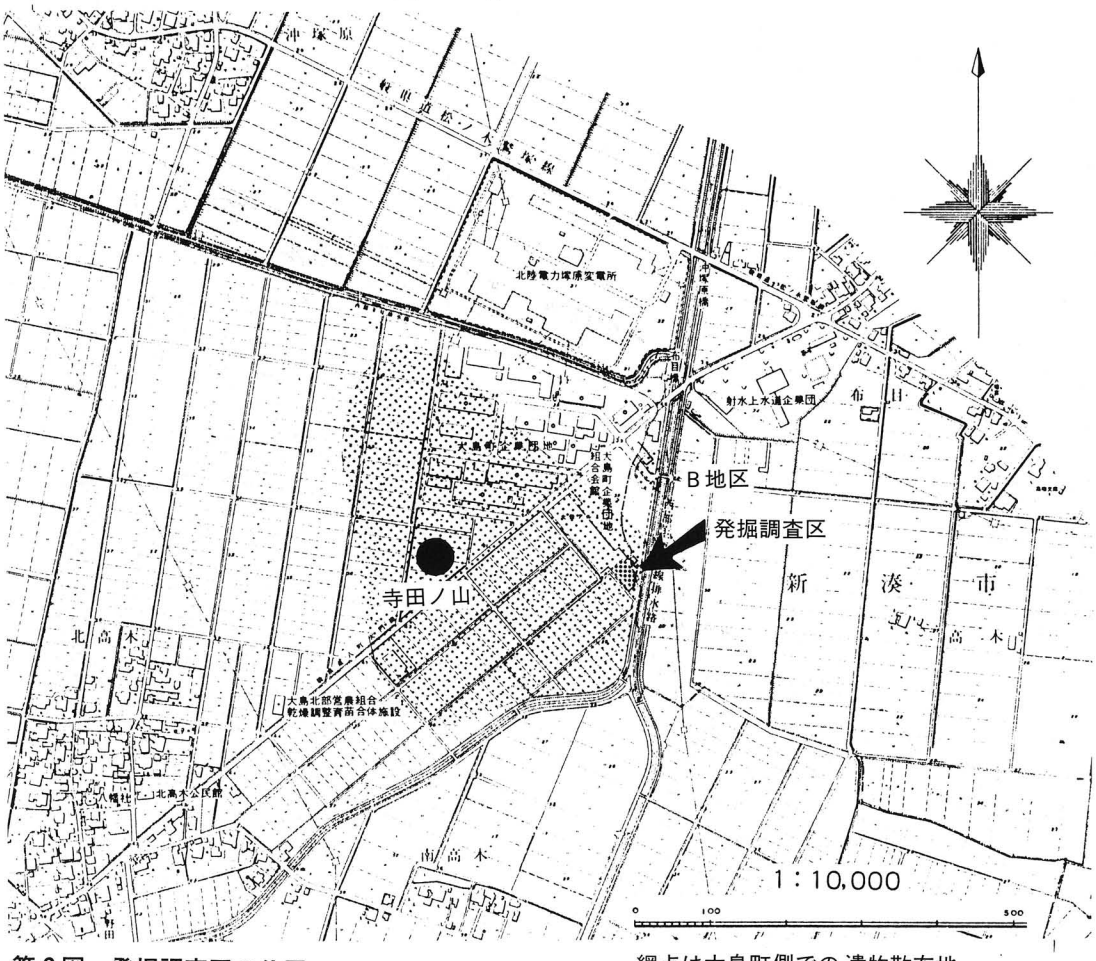
II．調査の概要

1．調査に至るまで

荒畑遺跡は、新湊市作道字高木に所在する遺跡として、昭和47年刊行の富山県遺跡地図に遺跡番号241 番として記載されている。しかし、その正確な位置や範囲、形成の時期、遺存状況などよくわかっていなかった。

昭和60年に隣接地で大島町企業団地が敷地を拡張することとなったため、富山県埋蔵文化財センター職員が現地を踏査したところ、土器が散布しており、遺跡の範囲に含まれることが確認された。敷地は大島町と新湊市の二市町にまたがっており、それぞれの教育委員会が主体となり、遺跡の遺存状況等を確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、昭和60年５月１日に富山県埋蔵文化財センターの調査員の立ち会いのもとに実施された。その結果、新湊市側では縄文時代晩期の遺物包合層と穴が発見され、そこをＢ地点とし、大島町と新湊市の境界付近では奈良・平安時代を主とする掘立柱建物の柱穴（直径30～50cmの穴が発見され、そこをＡ地点とした。(第３図)



第２図　発掘調査区の位置　　網点は大島町側での遺物散布地

そして、B地点については、工場が立つ約120 ㎡について、引き続き同年８月19日から９月２日まで、発掘調査を実施した。その結果、縄文時代後期（気屋式）、晩期（下野式）、弥生時代中期の土器、石鏃が出土した。〔県教委1986〕A地点は当面その上に建物が立たないことから、盛土だけを行うこととなった。

2. 本　調　査（第２図）

昭和63年になって、A地点で大栄アルミ工業株式会社がアルミ形材保管倉庫の増築を行うこととなった。そのため、大島町教育委員会が主体となり発掘調査を実施することとなった。

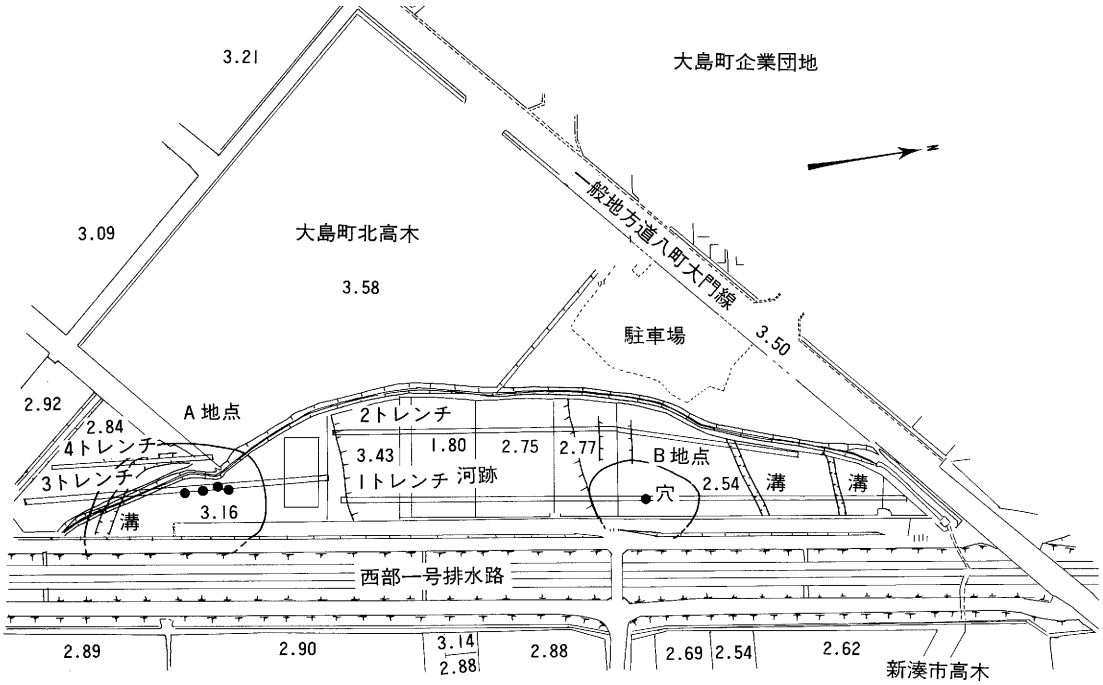
建物は、遺跡の範囲にかかる所は、ひさしとするため、ひさしの支柱部分のみを対象として、同年６月13日から６月16日まで実施した。しかし、その後、ひさしを変更し建物の中にとり込むことに変更になったため、10月17日から10月21日まで、再度発掘調査を行うこととなった。

調査はまず厚さ２ｍの盛土と旧耕土をバックホウで除去し、その後人力により発掘した。発掘面積は200 ㎡である。調査は、富山県埋蔵文化財センターの職員が立ち会った。

3. 基 本 層 序（第５図．写真16）

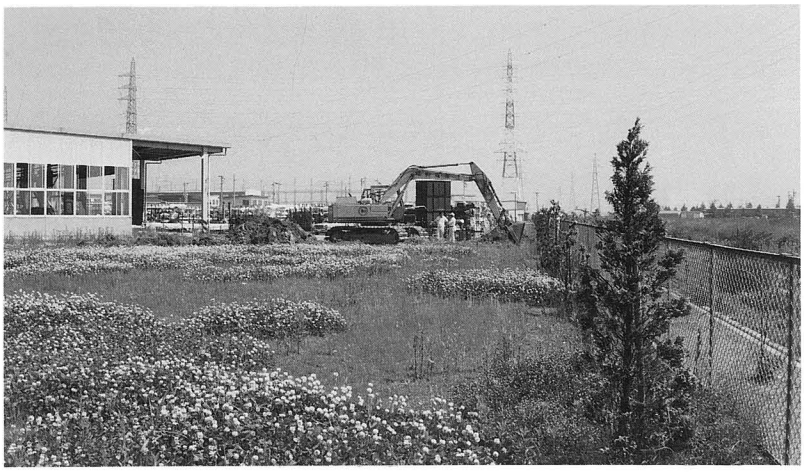
調査区は、西側が最も高く、西側と南側へゆるやかに傾斜する地形である。

基本的な層序は、Ⅰ、黄色砂層（盛土）厚さ210 ㎝、Ⅱ、灰色粘土層（耕土）厚さ30㎝、Ⅲ、灰褐色粘土層（酸化鉄分多い）厚さ15㎝、Ⅳ、黒色粘土層（遺物包含層）厚さ10㎝、Ⅴ、灰黒色粘土層（漸移層）厚さ６㎝、Ⅵ、灰白色粘土層（地山）となる。Ⅵ層上面の標高は約２ｍである。



第３図　試掘調査区と遺跡の範囲(1/2000)

写真 2



調査区南西より

調査風景

調査風景

Ⅲ．遺構と遺物

発掘された遺構は、奈良時代後半期の溝１、中世の溝２、時期不明の溝と穴がある。

遺物は、弥生時代中期の土器、奈良時代後半期の須恵器、土師器、瓦、硯、土錘、木器、中世の土師質小皿、珠洲、瀬戸・美濃、青磁、白磁、石製錘がある。奈良時代と中世のいずれにも伴う可能性がある鉄滓、炉壁、馬の歯、肋骨などの骨がある。

遺物量は、整理箱に39箱あり、そのうち木器が６箱、中世のものは１箱にすぎない。

1．遺構（第４・５図）

ＳＤ01

調査区の南寄りにあり、地形が南側へ傾斜を強める所である。

幅２ｍ深さ40cmで南西から北東へ向う浅い溝である。

溝覆土は黒色土であるが、土層がやや白っぽい。溝の北半では、黒色土が溝内をこえて広がり基本層序Ⅵ層とつながる。溝内と溝周辺の黒色土中から奈良時代後半期の遺物が大量に出土した。

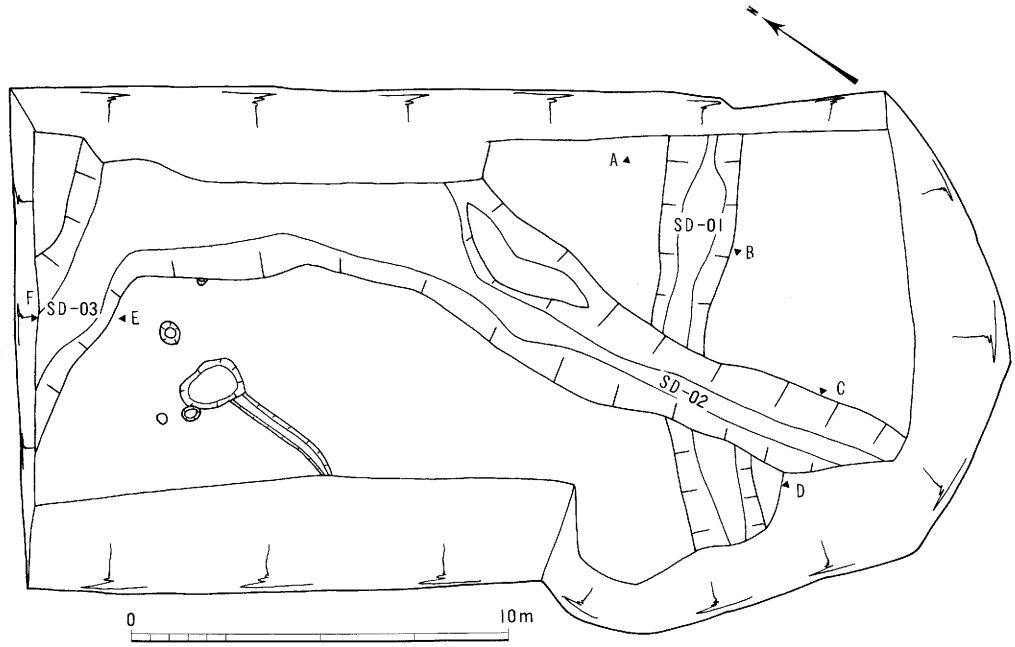
ＳＤ02

調査区の中央を南から北へ流れる溝である。北側でＳＤ03と合流する。

幅2.2～3.5ｍ深さ50cmで、底面はやや平坦である。

溝覆土は、上層にわずかに基本層序Ⅲ層がのるが、ほとんど灰黒色粘土層の単層で埋まっている。

溝内から、14世紀代の珠洲すり鉢、ヨシを描いた珠洲壺、石製錘、馬の歯、骨が出土している。



第４図　遺構図(200分の1)

ＳＤ03

調査区の北側にあり、西から東へ流れる溝である。北側でＳＤ 02 と合流する。

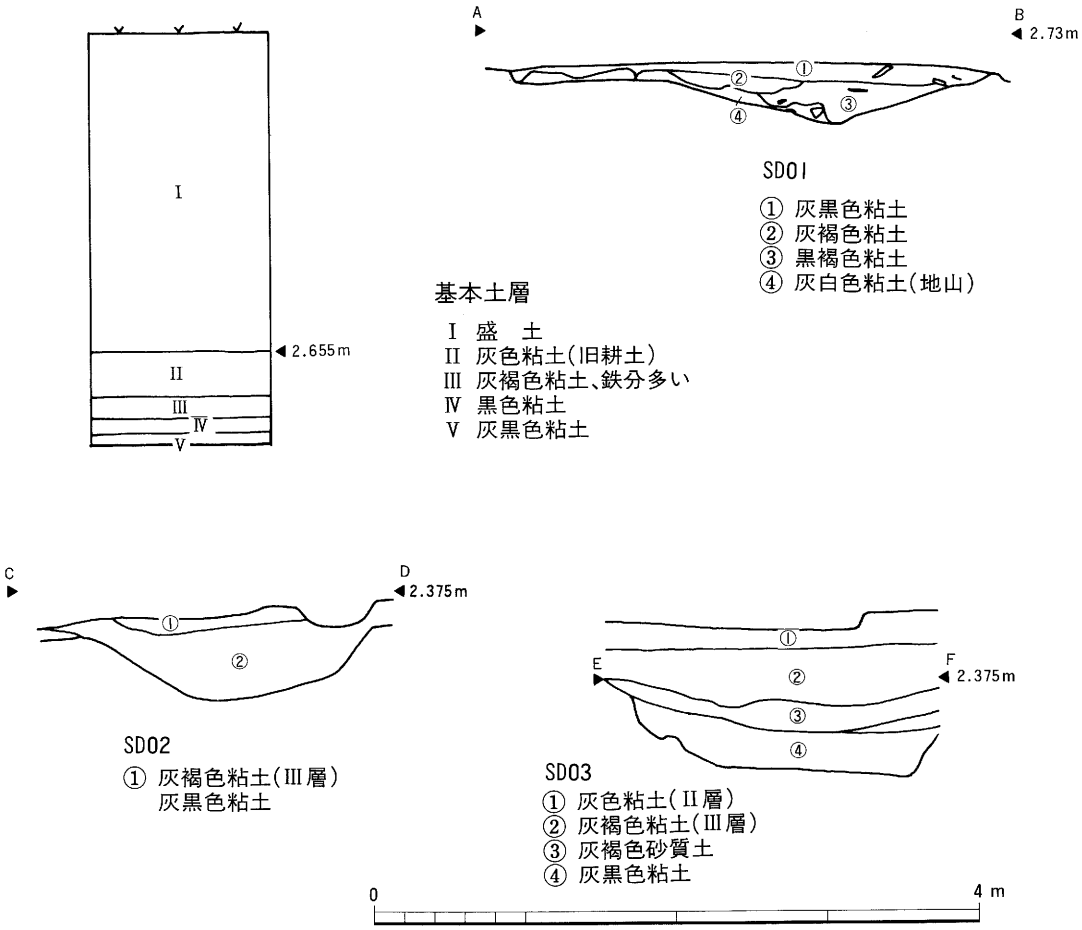
幅2.5 m深さ60cmで、底面はやや平坦である。

溝覆土は、上層に基本土覆Ⅲ層がのり、ついで灰褐色砂質土と灰黒色粘土となる。灰黒色粘土はＳＤ 02 と同じ土であるが、厚さはＳＤ02 の半分くらいである。ＳＤ02 にない灰褐色砂質土をもつことから、ＳＤ02 が埋まった跡もＳＤ03 は溝として機能していたことが考えられる。

溝内からは、14世紀代とみられる土師質小皿、珠洲甕と、15世紀代になると思われる白磁皿が出土した。

その他の遺構

調査区の北西部に幅40cm深さ10cmの溝１、径120～160cm深さ20cmの穴１、径20～40cmの穴４か所がある。遺物はなく時期は不明である。



第５図　土層図

写真 3

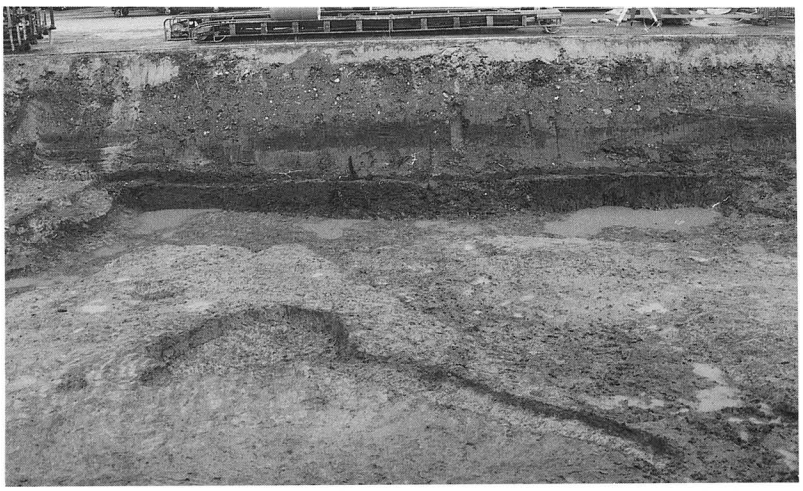
調査区南より

調査区北より

調査区西より

写真 4

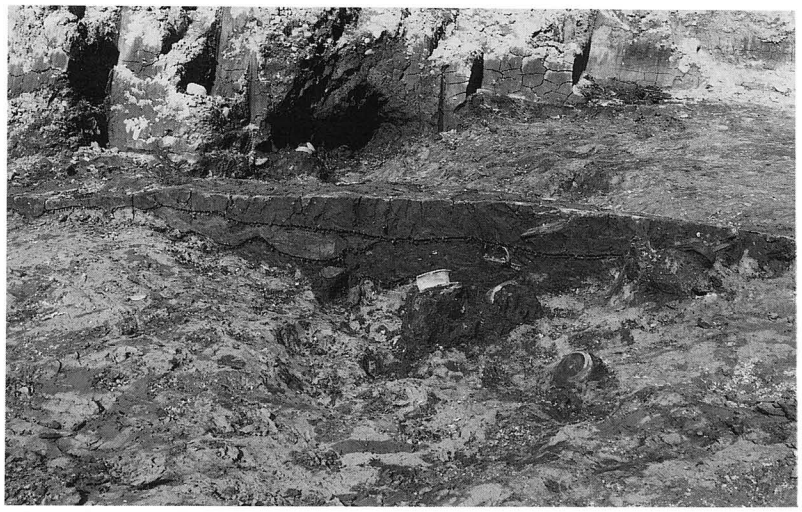
調査区北より



調査区南西より

SD01南区
南西より

写真 5



SD01土層

SD02土層

SD03土層

2 遺　物

弥生時代（第６図）

底径6.8cm底部の厚さ1.5cmの甕形土器の底部である。外側にハケ目を施す。弥生時代中期のものである。

ＳＤ０１から須恵器、土師器に混じって１点だけ出土した。

第６図　弥生土器

奈良時代（第７図～第16図）

ＳＤ０１とその周辺の黒色土中から出土した。ＳＤ０２と交差するところでは、攪乱により一部ＳＤ０２からも出土している。

須恵器（第７～９図　表１・４・５）

高台を付けない杯、高台を付けた杯、杯の蓋、長頸瓶、短頸壺、短頸壺の蓋、双耳瓶、広口瓶提瓶の種類がある。

杯（２～45、143～145、147・148・150・151・153～155）口径は11cmから14cm、高さは2.5 cmから3.8cm、底径は6.4cmから９cmの幅がある。色調は灰色のもの、青（緑）灰色のものがあり、胎土に砂粒が目立つものとそうでないものがある。

口径では、14cmの45がとびぬけて大きく他のものと区分できる。

高さについてみると、３cmを越えるものと３cmを越えないもの（34～37、39～45、153・154）とに区分できる。

すなわち、口径と高さで区分すると、杯は口径11.5～12.5cm高さ３～3.5 cmのもの（Ａ類）、口径11～12cm高さ2.5～３cmのもの（Ｂ類）、口径14cm高さ2.7cmのもの（Ｃ類）の３種類にわけることができる。そのように分けると、Ａ類が底部が丸味をもち不安定な底のものが多いが、Ｂ類、Ｃ類は底が平坦で安定した底のものが多い。器壁もＢ類、Ｃ類はＡ類に比べやや薄いつくりとなっているように思われる。

色調が内外とも褐色のものがある。（６・11・17・24・29・44・147）器表面に薄く漆がけを行なっているようである。また、煤が全面もしくは口縁部に付着したものがある。（９・10・30・32・42・44）灯火器として用いられたのであろう。

底部外面、体部外面に墨書したものが24点ある。（６～８・13～15・22～29・38～40・150・151・143～145・147）

高台杯（57～71・146）口径は10.2cmから15.6cm、高さは4.1cmから6.8cm、底径は6.2cmからら8.8cmの幅がある。色調は灰色のもの、青（緑）灰色のものがあり、胎土に砂粒が目立つものとそうでないものがある。

口径と高さで区分すると、口径が10.2～12.4cm高さ4.1～4.8cmのもの（Ａ類）、口径15cm高さ5.3cmのもの（Ｂ類）、口径15.6cm高さ6.8cmのもの（Ｃ類）にわけることができる。高台の高さは３～７mmと低い。

底部外面に回転糸切り痕をとどめるものがある。（70・71）

60は、底部外面に墨痕があり、硯に転用しているようである。

杯　蓋（46～56・152）口径は11cmから19.8cm、高さは2.4cmから4.2cmまでの幅がある。紐の径は2.1cmから3.2cmまである。

形の特徴としては、頂部はやや平坦で端部に至る所でやや屈曲する。端部は内側に段をもち肥厚する。

口径は11～14cmのものが多く、15cmをこえる54、16cmをこえる55、20cm近い56などばらつきが大きい。

27は内面を硯として用いており、このような転用硯は他に数点ある。55、152は墨書がある。

第7図　須恵器　杯

長頸瓶（72・82）　72は口径7.5cm頸部の長さ８cmのもので、胴部との境の内面には漆が付着している。胴との境は意図的に打ち欠かれたような割れ口をしており、漆容器として用いられ、中の漆を取り出すために壊されたものと思われる。

漆がついたものは、この他に土師器椀１点、須恵器杯４点がある。

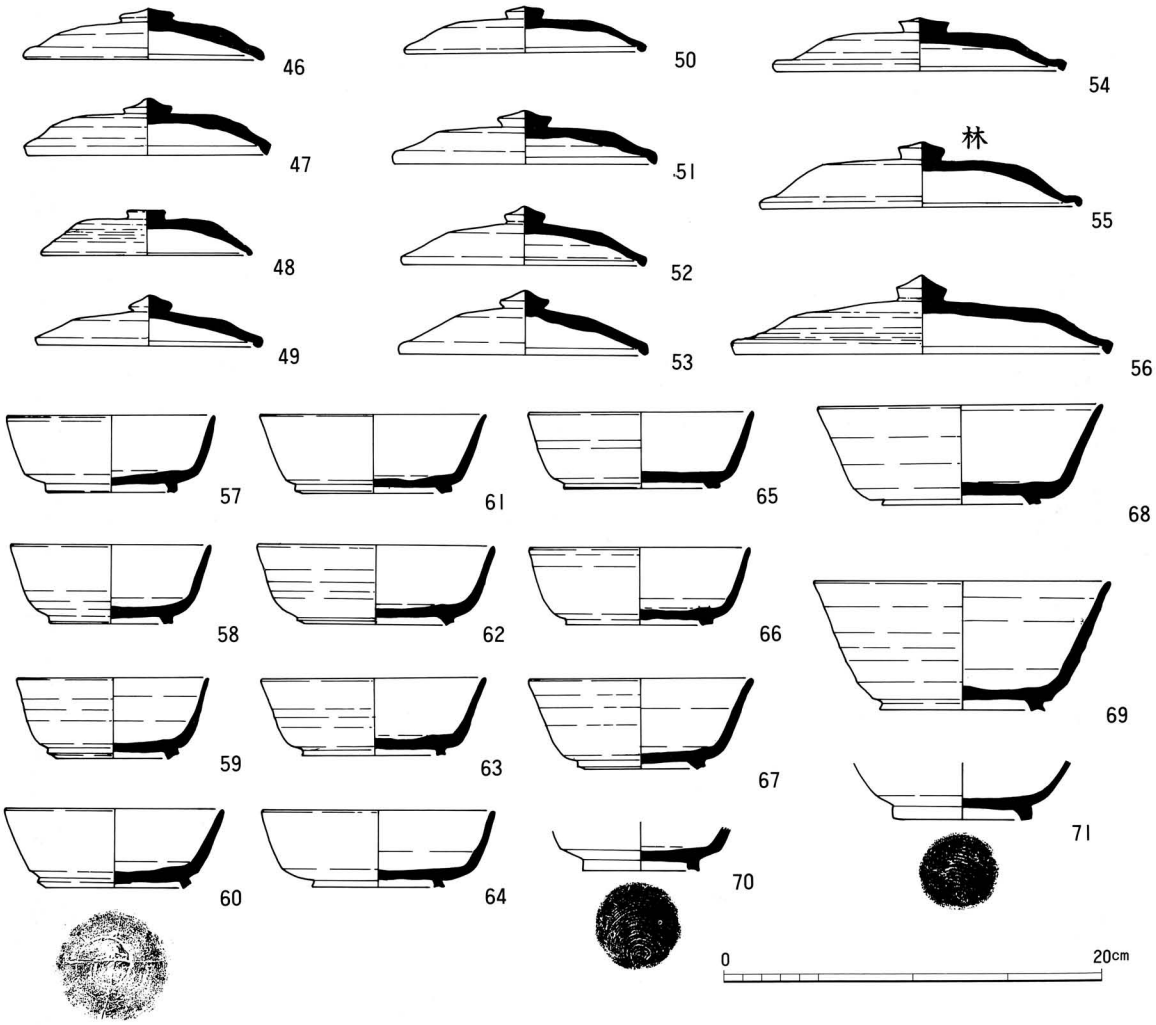
短頸壺とその蓋（73～75）　75は口径10.2cmの短頸壺、73・74はその蓋で、73は口径10.2cm、74は口径10.8cm高さ5.8cm（そのうち体部の高さは３cm）である。

双耳瓶（76）　四角い耳（把手）の部分とみられる。内面は円形あて具痕がある。

広口瓶（79）　口径26.8cmである。口縁部は断面三角形である。

横　瓶（80）　口径9.6cmのもので、体部内面に円形あて具痕、外面に平行タタキ目がある。

底　部（81～83）　壺が瓶の底部。83は鉢の底部かもしれない。

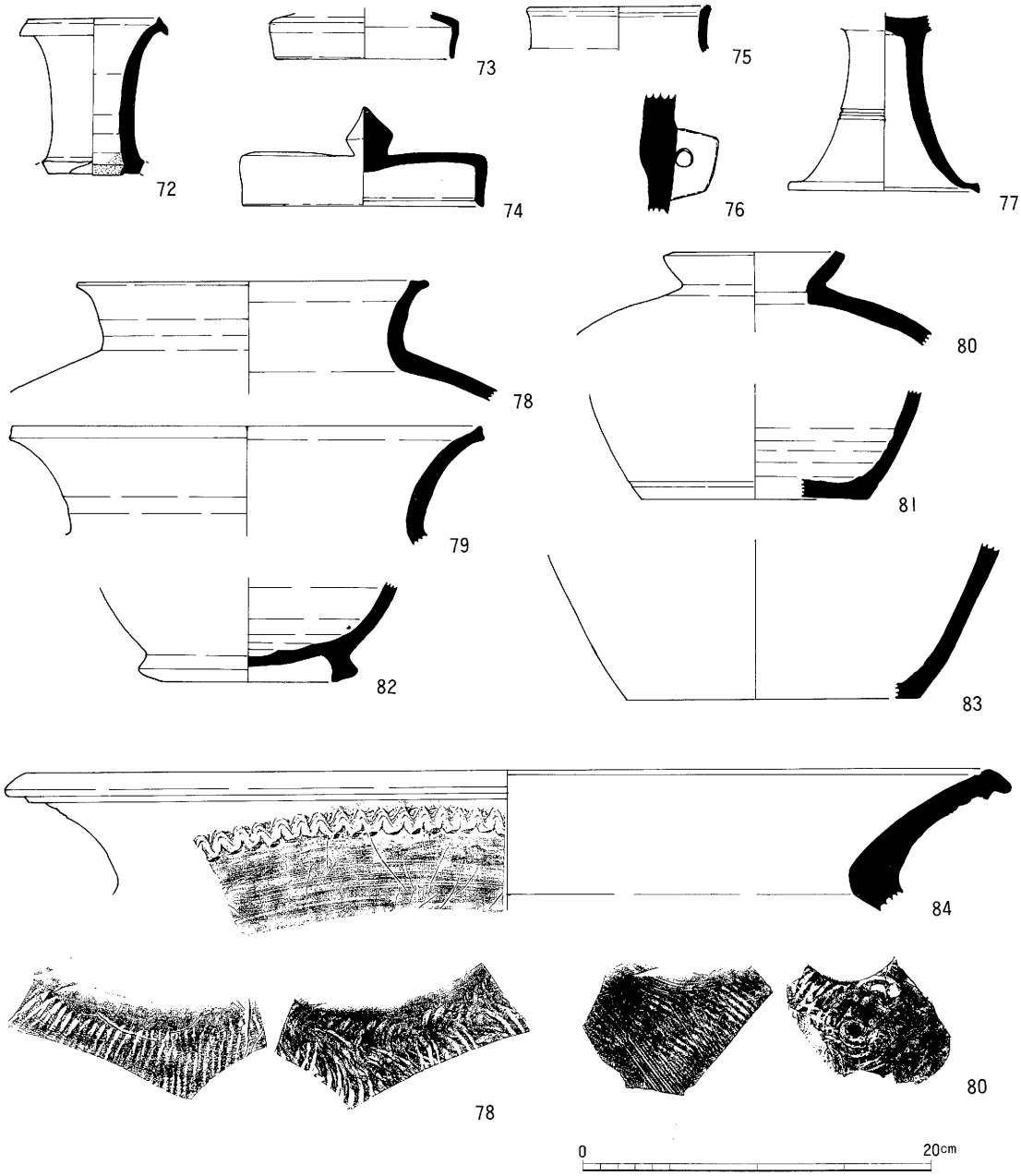


第８図　須恵器　杯蓋、高台杯

高　杯（77）　脚部である。底径11cm高さ8.2cmで中央部に２条の沈線をめぐらす。

甕（78・84）　78は口径18.4cmの小型甕、体部内面は円形あて具痕、外面は平行タタキ目を施す。

84は口径55cmの大型甕、頸部に櫛状具による波状文をめぐらす。



第９図　須恵器　瓶、壺、高杯、甕

土師器（第10～11図　表６）

黄灰色または赤灰色をした軟質の土器。椀、台付杯、蓋、甕、鍋の種類がある。

椀（85～94・97～101）　口径は10.5cmから19.4cm、高さは3.7cmから7.4cm、底径は5.2cmから6.9cmの幅がある。

体部は内湾ぎみに立つ形態のものが多い。

口径と高さで区分すると、口径10.5～13.2cm、高さ3.7～3.9cmの小型のもの（85～91）、口径16cm高さ5.5cmの中型のもの（92）、口径19.4cm高さ7.4cmの大型のもの（93）の３種類がある。

底部外面の仕上げについてみると、ヘラケズリのものと、回転糸切り痕を残すもの（88・89・98・99・101）がある。

91・92は外面を赤彩し、内面は黒色仕上げとし、94・98・99は内面を黒色仕上げとしている。

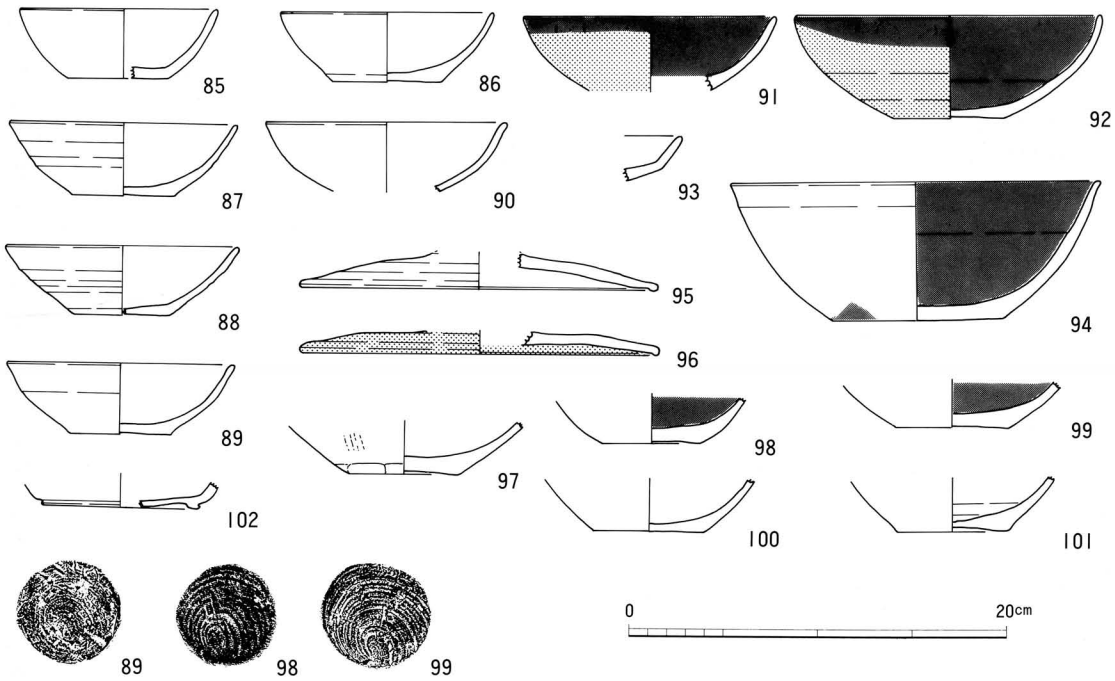
93は口縁部と体部の境で屈曲するもので、台付の皿となるかもしれない。

91・92・97・98・100は内面をヘラミガキしており光沢がある。

台付椀（102）　底径8.5cmのものである。

杯　蓋（95・96）　口径19cmの大型のもの。高さが低く扁平な感じのもので、端部は丸くふくらむ。

96は内外面とも赤彩されている。

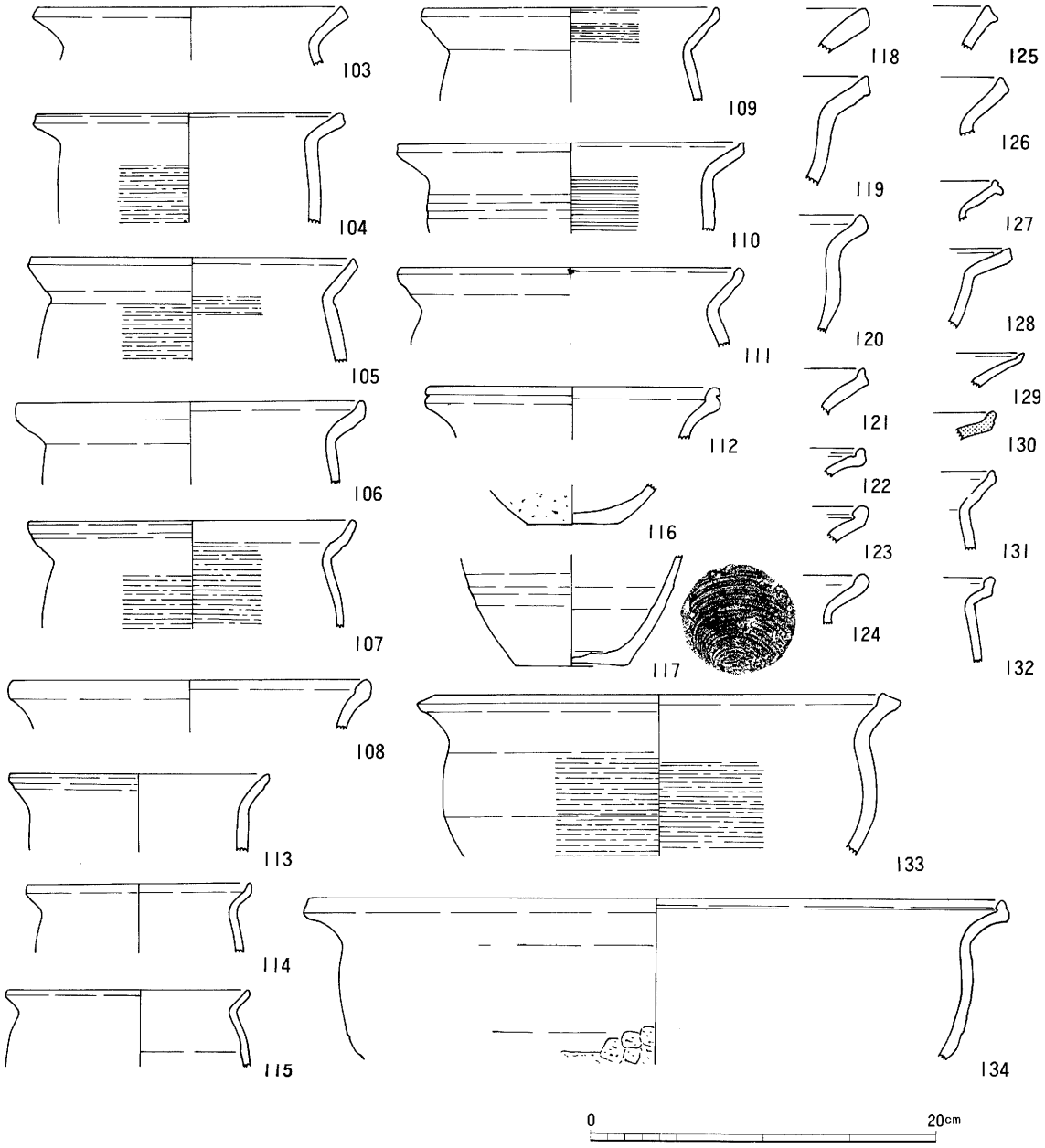


第10図　土師器　椀、蓋

甕（103～118・121～127・129～132）　砲弾形の胴部にくの字に外反する口縁部がつくもの。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は内外面カキ目を施す。

口径は17～20cmの大型のものと口径13～15cmの小型のものがある。

口縁端部の形態で4種類に区分できる。すなわち、口縁端部断面形が四角く、口唇面が斜め上をむくもの（103・104など）、口縁部断面が三角形状になり、口唇面がやや横方向をむくもの（105・110など）、口縁部内側に段ができ、口縁端部が立つもの（106・109など）、口縁端部が丸いもの（107・113・115）がある。



第11図　土師器　甕、鍋

116・117は、小型甕の底部である。117は胴部下半に長さ7.5㎜幅３㎜禾の長さ７～８㎜の稲籾圧痕がついている。129は薄くていねいなつくりで実用品でないかもしれない。

鍋（133・134・119・120・128）　鉢形の体部にくの字に外反する口縁部がつくもの。口縁部は内外面ヨコナデ、体部は内外面カキ目を施す。下半部はヘラケズリを施す。

134は口径40cmのもの。133は口径26cmで図化したが、破片であるので実際はもっと大きいものとなるかもしれない。

口縁部断面は甕と同様に、断面が四角く口唇面が斜め上を向くもの（133）、三角形に尖がるもの（119・120）、内側に段をもって立つもの（134）の種類がある。

瓦（135～138）　平瓦（135・136）と丸瓦（137・138）がある。灰色をしている。138がＳＤ01から、他はＳＤ01と交差する所のＳＤ02内から出土した。

135・136は凸面に縄叩目、凹面に布目痕がある。縄目は幅３cmに８～９本、布目は幅３cmに縦糸18～20本である。凸面には離れ砂を用いておりザラザラしている。

137は、凸面は一部縄叩目がみえ、ナデで消しているようである。凹面には布目痕がある。138は凸面はナデ、凹面は布目痕がある。布目は幅３cmに縦糸18本横糸20本である。

表―１　須恵器杯観察表

番号	口径	高さ	色調、胎土など	番号	口径	高さ	色調、胎土など
2	11.8	3.6	灰色、白い砂粒	26	11.4	3.6	灰色　白い砂粒
3	11.8	3.5	緑灰色　〃	27	12.3	3.3	青灰色
4	11.5	3.5	青灰色　〃	28	12.4	3.2	〃　白い砂粒
5	11.4	3.6	茶灰色	29	12.4	3.3	〃
6	11.4	3.3	褐色	30	11.9	3	〃
7	11.5	3.1	灰色	31	11.8	3.1	緑灰色
8	11.7	3.5	〃　白い砂粒	32	11.7	3	灰色
9	11	3.5	〃	33	11.2	3	青灰色
10	11.8	3.8	〃	34	11.4	2.8	〃
11	10.8	3.2	褐色	35	11.6	2.8	〃
12	11	3.5	青灰色　白い砂粒	36	11.8	2.8	〃
13	11.8	3.3	〃	37	11	2.8	〃
14	11.5	3.5	〃	38	11.5	3	〃　白い砂粒
15	11.4	3.5	青灰色　白い砂粒	39	11.4	2.9	〃　〃
16	12.8	3.8	灰色	40	11.4	2.8	〃　〃
17	11.8	3.4	褐色	41	11	2.7	灰色
18	10.8	3.3	青灰色	42	11	2.5	青灰色
19	11.4	3.3	〃	43	11.6	2.8	灰色
20	11.4	3.3	灰色	44	11.8	2.9	褐色
21	11.4	3.1	褐色	45	14	2.7	青灰色
22	11.2	3.2	灰色　白い砂粒	143	11.4	3.3	〃　白い砂粒
23	12.4	3.5	〃	144	12	3.5	青灰色　白い砂粒
24	12.3	3.7	〃	147	11.6	3.4	灰色
25	12	3.3	青灰色	153	11.5	2.9	青灰色　白い砂粒

土錘（139・140）　灰色をしている。139は重さ25ｇ、140は140は重さ125ｇである。

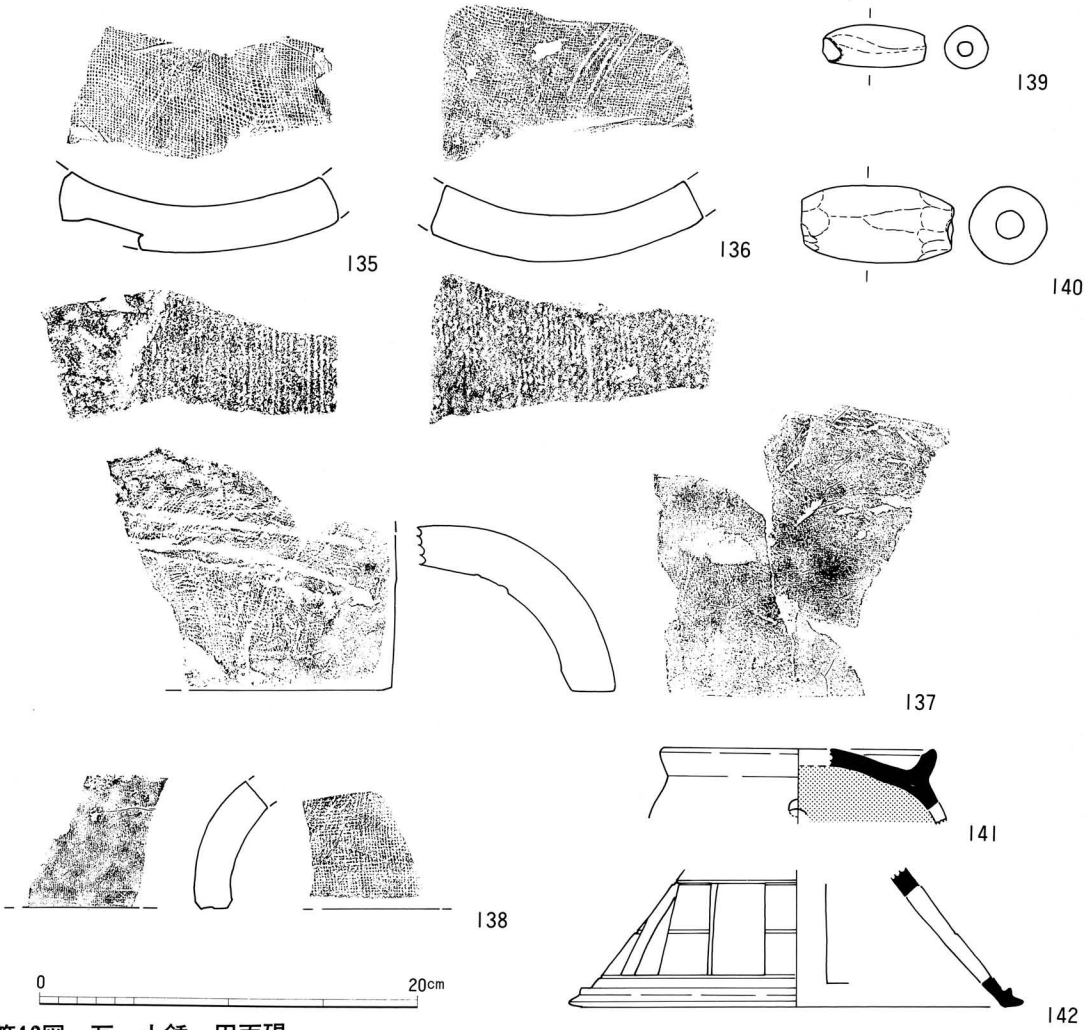
円面硯（141・142）　141は口径14cmで脚台部に円形の透穴がある。陸部は黒く、裏面は赤い。赤書のための硯として転用しているらしい。142は脚台部の径を24cmに図示したが小片のため不明である。脚台部は３条の沈線と方形の透穴がある。

墨書土器・箆書土器（第８・13～15図、表２・３）

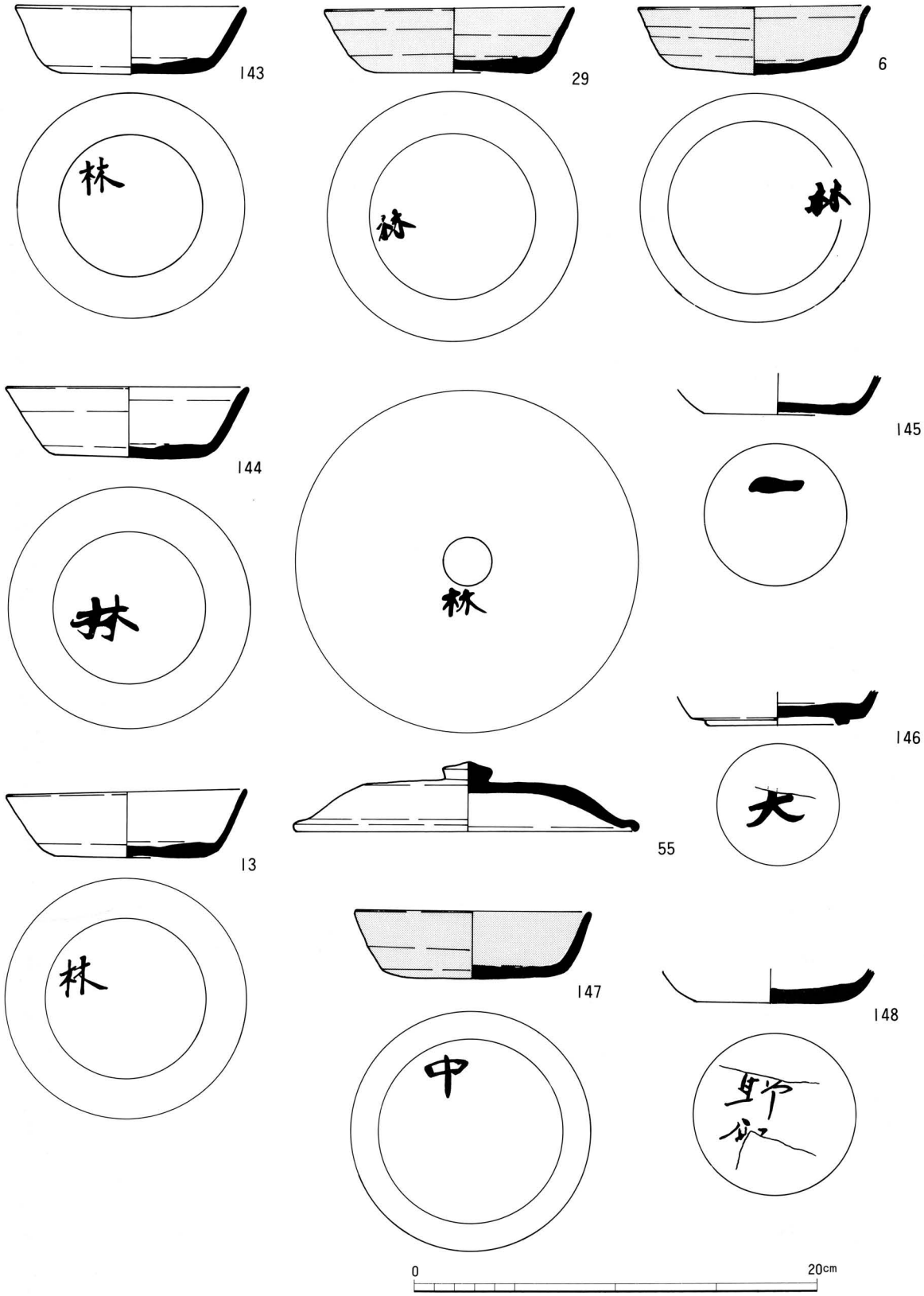
ＳＤ０１とその周辺の黒色土中から出土した。すべて須恵器である。墨書土器は31点で、杯24点、台付杯３点、杯蓋４点である。箆書土器は台付杯１点である。

墨書の位置は、杯は底部外面に多く、体部外面のものがわずかである。台付杯は、底部と体部外面に、杯蓋は頂部内面と外面のものがある。箆書は底部外面に「一」を引くもの１点である。

墨書の種類は、「林」が６点、「東」が５点、「庄」が５点、「二」が３点、「真」が２点、「中」が１点、「一」が１点、「大」が１点、「メ」が１点、その他記号のようなもの、不明のものが４点である。一字のものが多く、二字以上のものは不明のもの１点だけである。



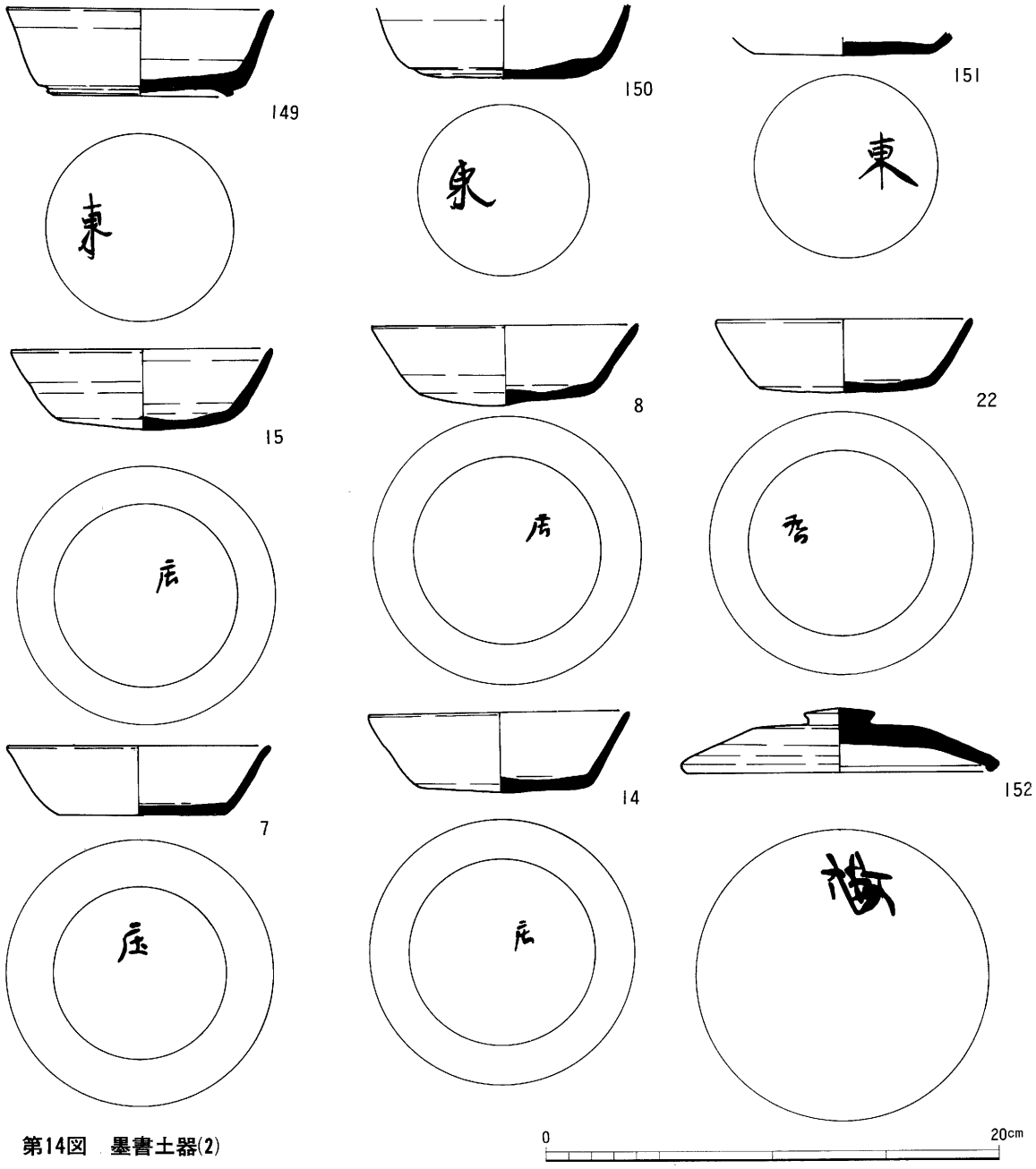
第12図　瓦、土錘、円面硯



第13図　墨書土器(1)

表－2　墨書土器・箆書土器(1)

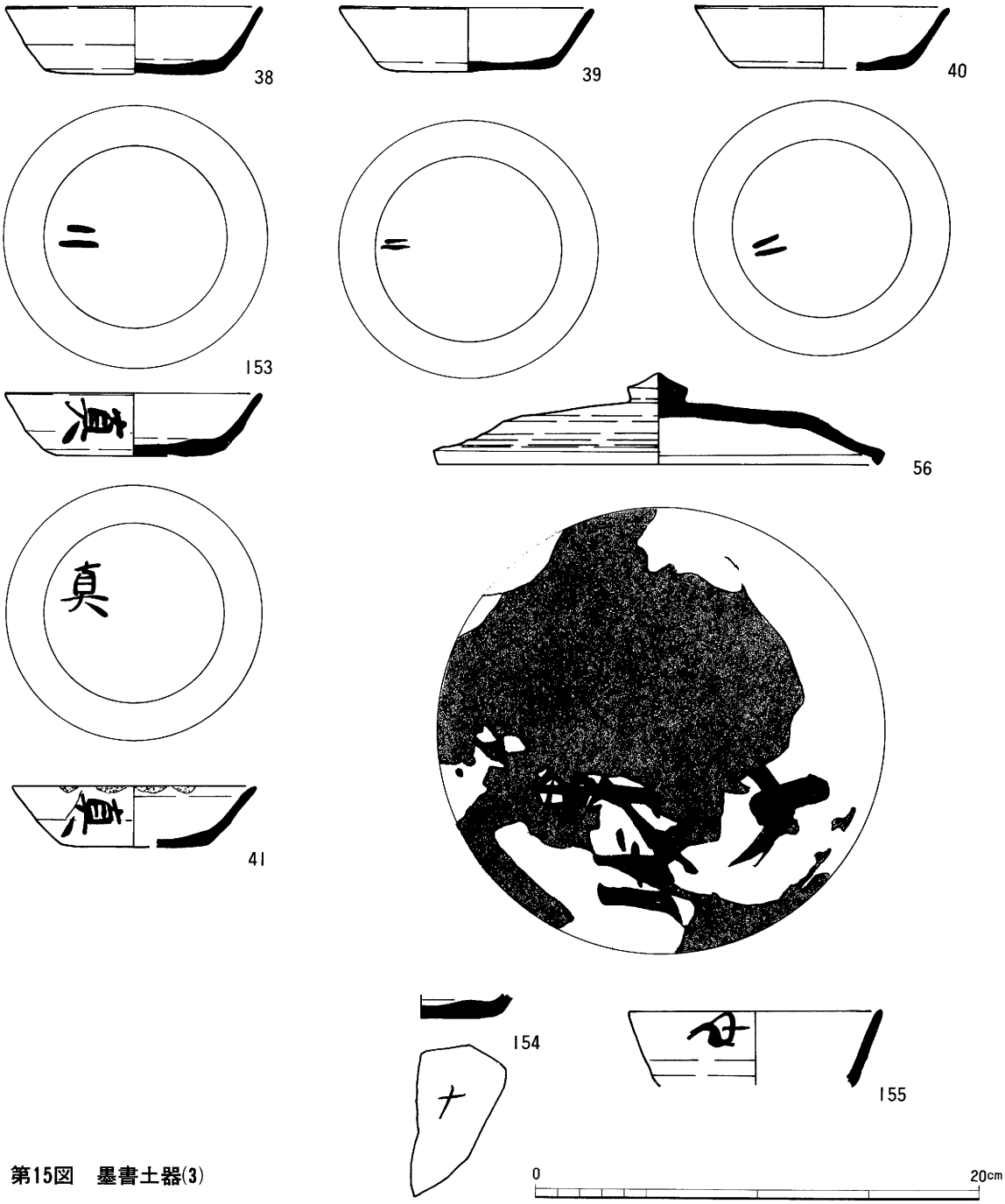
番号	文字	器種	記載位置	番号	文字	器種	記載位置
143	林	杯	底部外面	148	口口？	杯	底部外面
29	〃	〃	〃	149	東	高台杯	〃
6	〃	〃	〃	150	〃	杯	〃
144	〃	〃	〃	151	〃	〃	〃
13	〃	〃	〃	15	庄	〃	〃
55	〃	杯　蓋	頂部外面	8	〃	〃	〃
145	一	杯	底部外面	22	〃	〃	〃
146	大	高台杯	〃	7	〃	〃	〃
147	中	杯	〃	14	〃	〃	〃



第14図　墨書土器(2)

表－3　墨書土器、箆書一覧(2)

番号	文字	器種	記載位置	番号	文字	器種	記載位置
152	口？	蓋	内面	155	口？	杯	体部外面
38	二	杯	底部外面		東か	〃	底部外面
39	〃	〃	〃		〃か	杯蓋	頂部外面
40	〃	〃	〃		口？	杯	底部外面
153	真	杯	体部外面 底部外面		口？	高台杯	体部外面
41	〃	〃	体部外面	60	ヘラ書き	〃	底部外面
56	土（習書）	杯蓋	内面				
154	メ	杯	底部外面				



第15図　墨書土器(3)

木器（第16図）

ＳＤ０１から整理箱に６箱出土した。棒や杭状のものが多い。用途が推定できる４点を図示した。

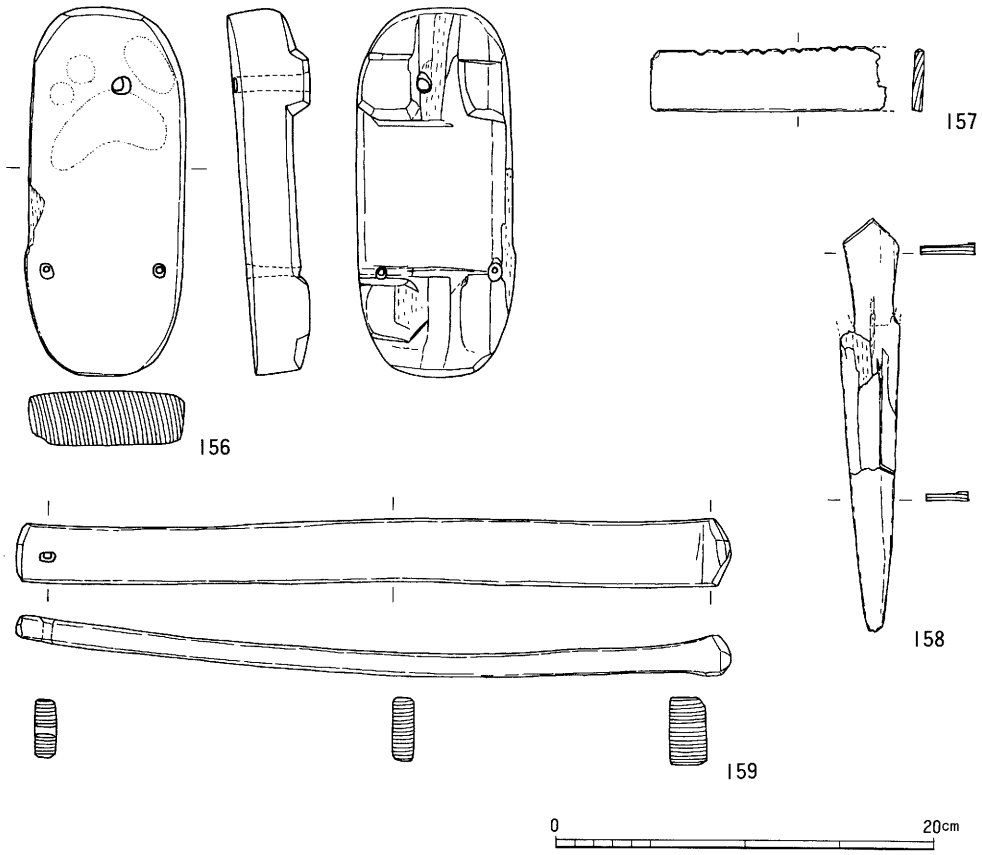
下駄（156）　長さ19.5cm幅8.2cm厚さ３cmの四隅が丸い小判状をしている。材は針葉樹（杉か）の柾目材を用いている。

歯は、中央を抉って四つの突起とする四枚歯である。前歯の厚さは現状で１cmである。鼻緒穴は、前歯と重なる位置に一孔、後歯の前側に二孔を穿っている。前歯側の穴は中央よりやや右手に寄っていること、指頭の圧痕からみて左足用のものとみられる。

編板（157）　幅3.2cm高さ５mmの針葉樹の板目材を用いている。右端を欠いているが、板の側面にほぼ１cm間隔に切れ込みをいれている。布を編むもの。

斎串（158）　頂部は三角形とし、肩部で両側から抉りを入れている。長さ21.8cm最大幅3.2cm厚さ５mmの針葉樹の板目材を用いている。

機織具の腰あて（159）　機織具の腰あてと思われる。長さ37.8cm幅3.5cm厚さ1.3cmのやや湾曲した針葉樹の柾目材を用いている。一端はやや厚くし、他の端は小穴を設けている。



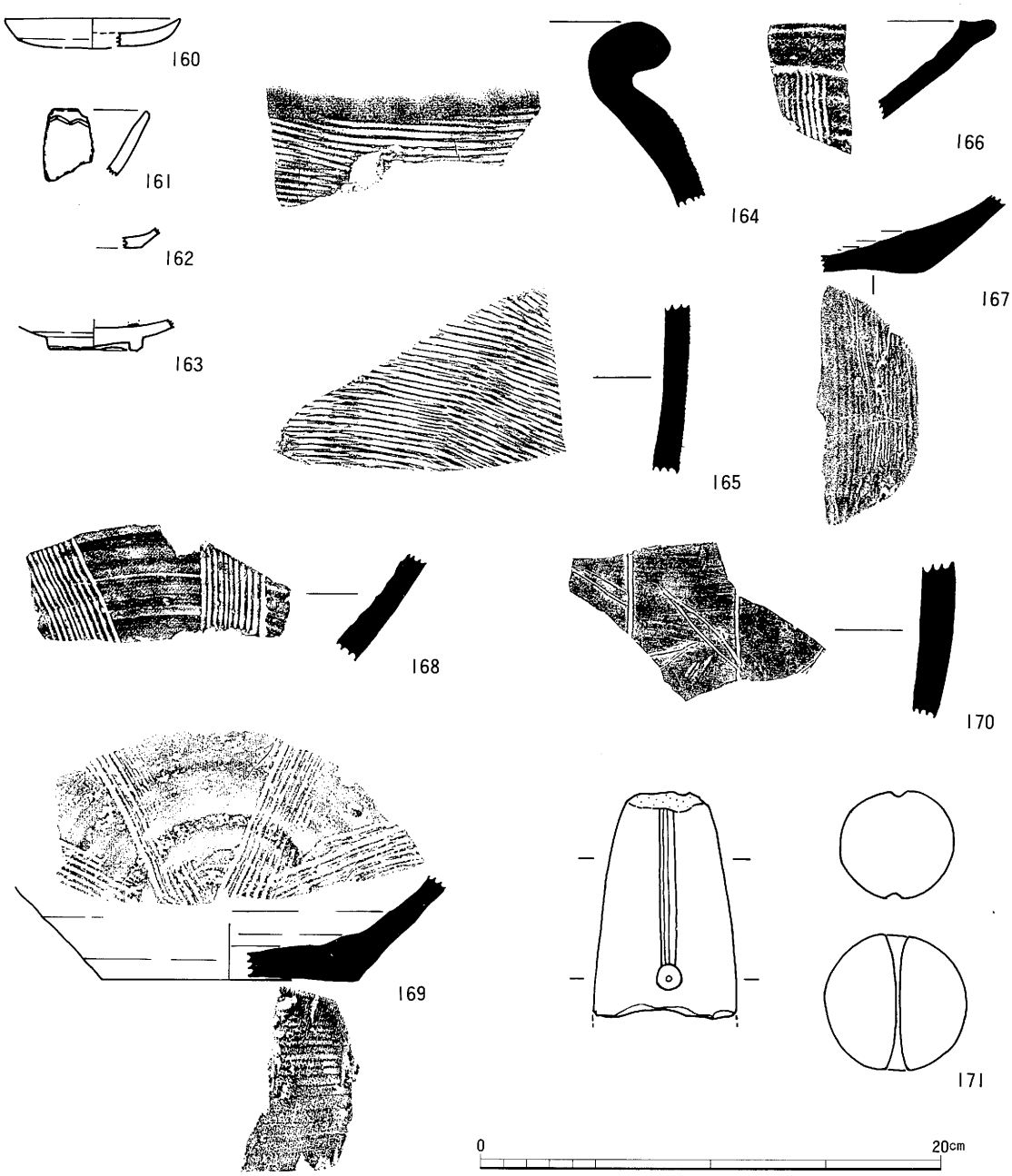
第16図　木　器

中世（第17図）

土師質小皿（160）　口径7.5cm高さ1.25cmのもの。赤灰色をしている。ＳＤ０３出土。

瀬戸・美濃（161）　黄色の釉薬を施した椀である。口縁部には山形の沈線を連続させる。15世紀後半～16世紀前半期の蓮弁文をもつ中国青磁を写したものとみられる。ＳＤ０１上層出土。

白磁（162・163）　中国製の皿である。163は高台に抉りがある。内面には重ね焼きの痕跡が残る。ＳＤ０３出土。



第17図　中世の遺物

珠洲（164～170）　164・165は甕、166～169はすり鉢、170は壺である。164・166の口縁部形態は大畠窯（14世紀代）の製品に類例がある。〔吉岡1976〕170は胴部にヨシを描いた壺。

石製錘（171）　最大径6㎝。下半部は欠失していて長さは不明。中央に小孔があり、穴にむかって幅7㎜の溝が相対して掘られている。紐をかける溝と穴であろう。石材は溶結凝灰岩で、常願寺川上流で産出するものである（邑本順亮氏の教示による）ＳＤＯ２出土。

鉄滓（写真15）

ＳＤ01から、２㎝から５㎝大の鉄滓が６点出土した。

ＳＤ01・ＳＤ 02・ＳＤ 03から２㎝～４㎝大の炉壁が各１点出土した。

歯と骨（写真15）

ＳＤ01・ＳＤ02・ＳＤ 03から約50点の歯と骨が出土した。うち40点近くがＳＤ02からの出土である。

歯、肩甲骨、肋骨などがある。表面は青くなっているものがあり（リン分の表出か）、焼けて白くなったものもある。

肋骨には刃物の傷をもつものがある。歯の特徴から馬のものとみられる。〔金子1984〕

表―４　須恵器高台杯観察表

番号	口径	高さ	色調・胎土など	番号	口径	高さ	色調・胎土など
57	11	4.1	灰色	64	7.4	4.1	灰色　黒い砂粒
58	10.6	4.2	青灰色　白い砂粒	65	11.8	4.1	緑灰色
59	10.2	4.3	〃	66	11.7	4.1	〃　白い砂粒
60	11.5	4.2	〃	67	11.8	4.8	
61	12	4.2	〃　白い砂粒	68	15	5.3	青灰色
62	12.4	4.2	茶灰色	69	15.6	6.8	〃　白い砂粒
63	11.8	4.1	〃	149	11.6	3.9	灰色

表―５　須恵器杯蓋観察表

番号	口径	高さ	色調・胎土など	番号	口径	高さ	色調・胎土など
46	12.6	2.7	青灰色　白い砂粒	52	12.8	3.1	青灰色
47	12.6	3	〃	53	13	3.5	緑灰色
48	11	2.4	〃	54	15.2	2.8	青灰色
49	10.8	2.7	〃	55	16.8	3.5	〃　白い砂粒
50	12.5	2.5	〃	56	19.8	4.2	〃
51	13.8	2.9	灰色	152	13.4	2.8	灰色　黒い砂粒

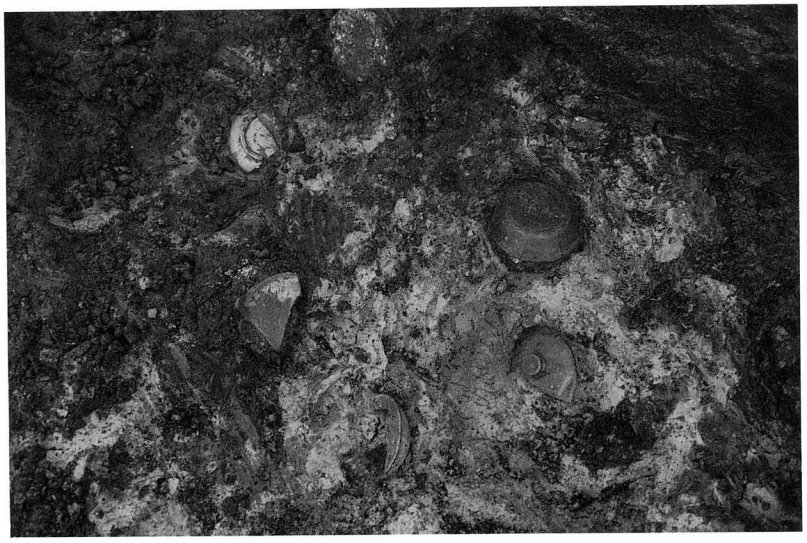
表―６　土師器椀観察表

番号	口径	高さ	色調・胎土など	番号	口径	高さ	色調・胎土など
85	10.5	3.7	ヘラケズリ	90	12.7		
86	11.2	3.7	〃	91	13.2		外面赤　内面黒
87	12	3.9	〃	92	16	5.5	〃　〃
88	12.2	3.7	回転糸切り	94	19.4	7.4	内面黒
89	12	3.8	〃				

写真 6

SD01土器
出土状況

SD01土器
出土状況

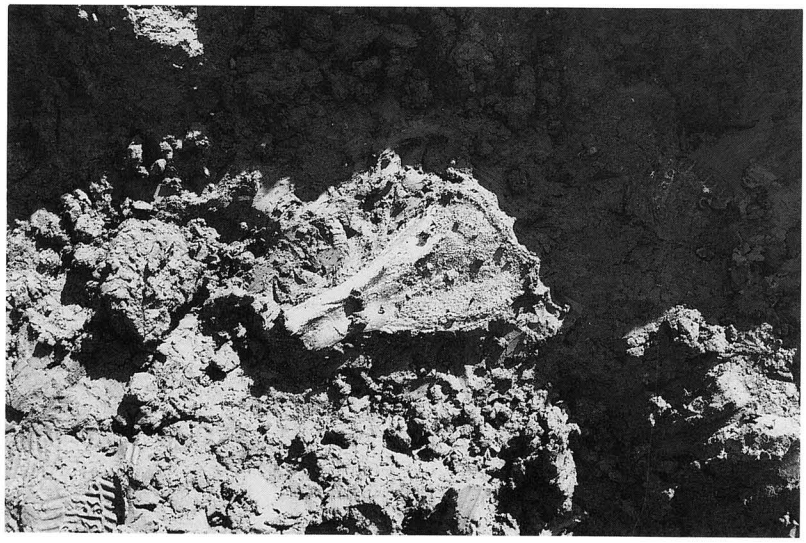


SD01土器
出土状況

写真 7

SD02円面硯
出土状況

SD01下駄
出土状況

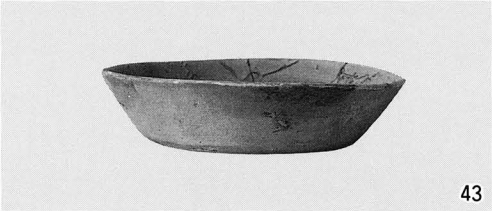


SD02肩甲骨
出土状況

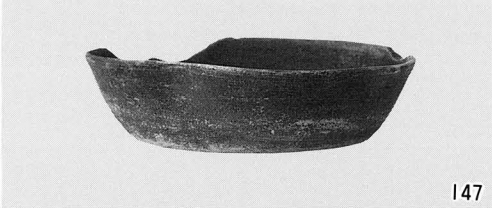
写真 8　須恵器

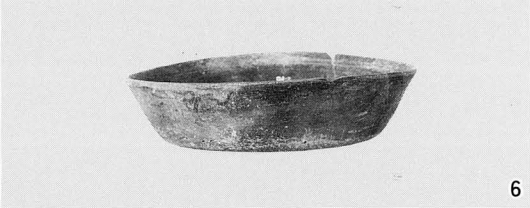
29

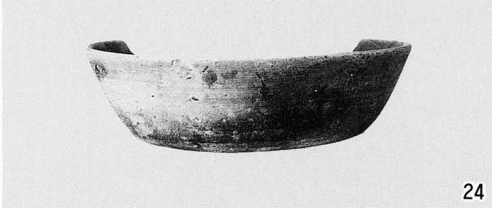
4

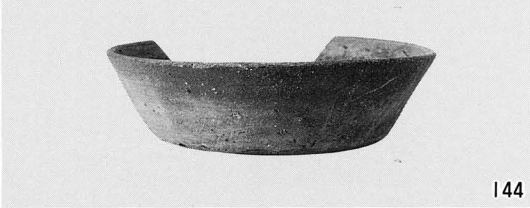

43

35

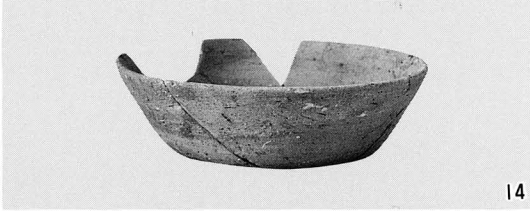

147

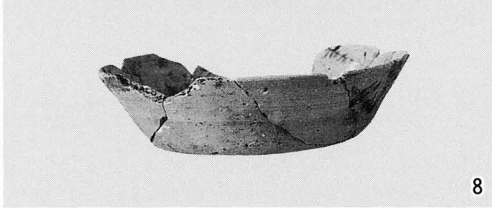

6

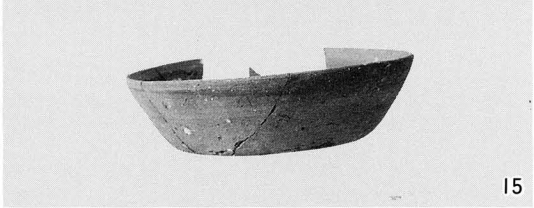

24

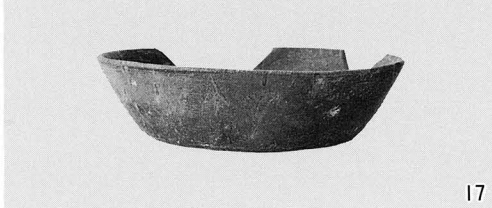

144

29


14


8


15


17

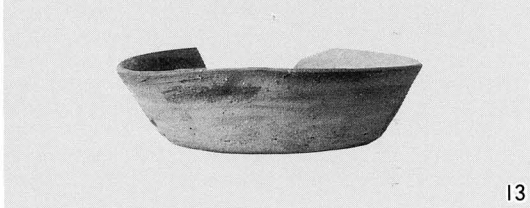
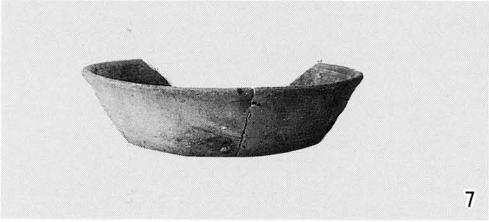
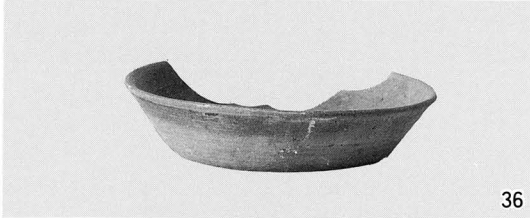

13

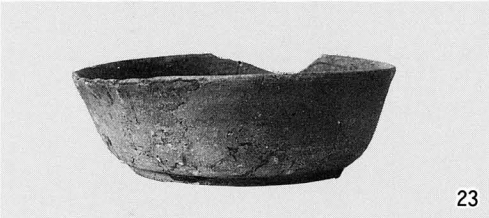
写真 9 須恵器・土師器

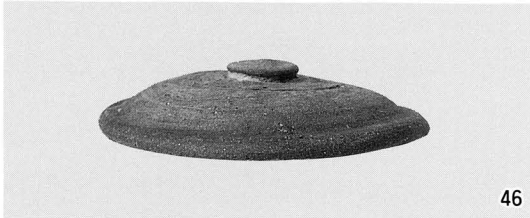

7

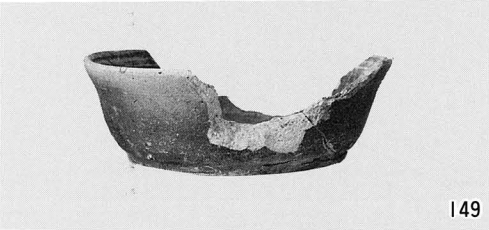

36

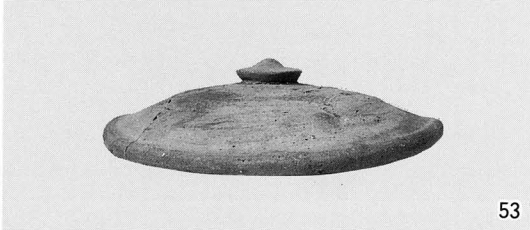
34

39


23

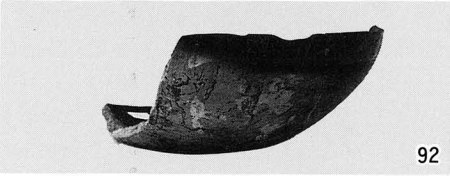

46

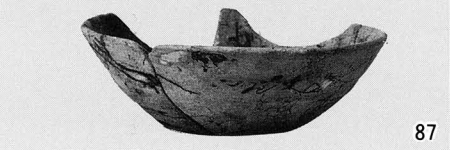

149


53

69

55


92


87

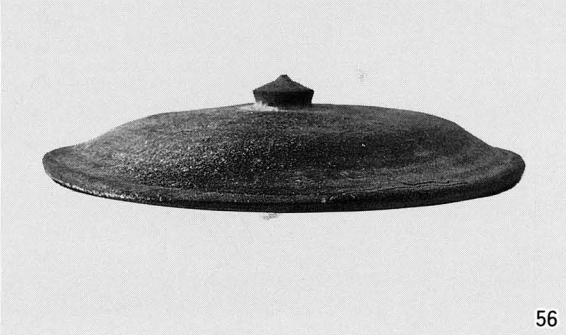
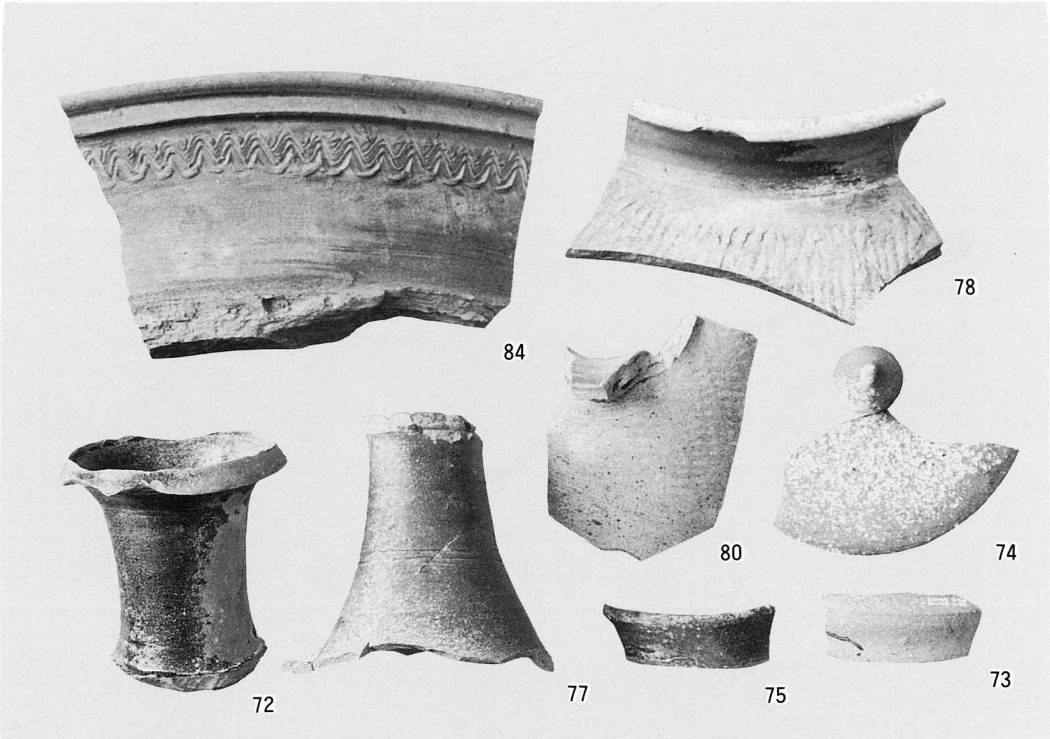

56

写真10　須恵器・土師器


84
78
80
74
72
77
75
73

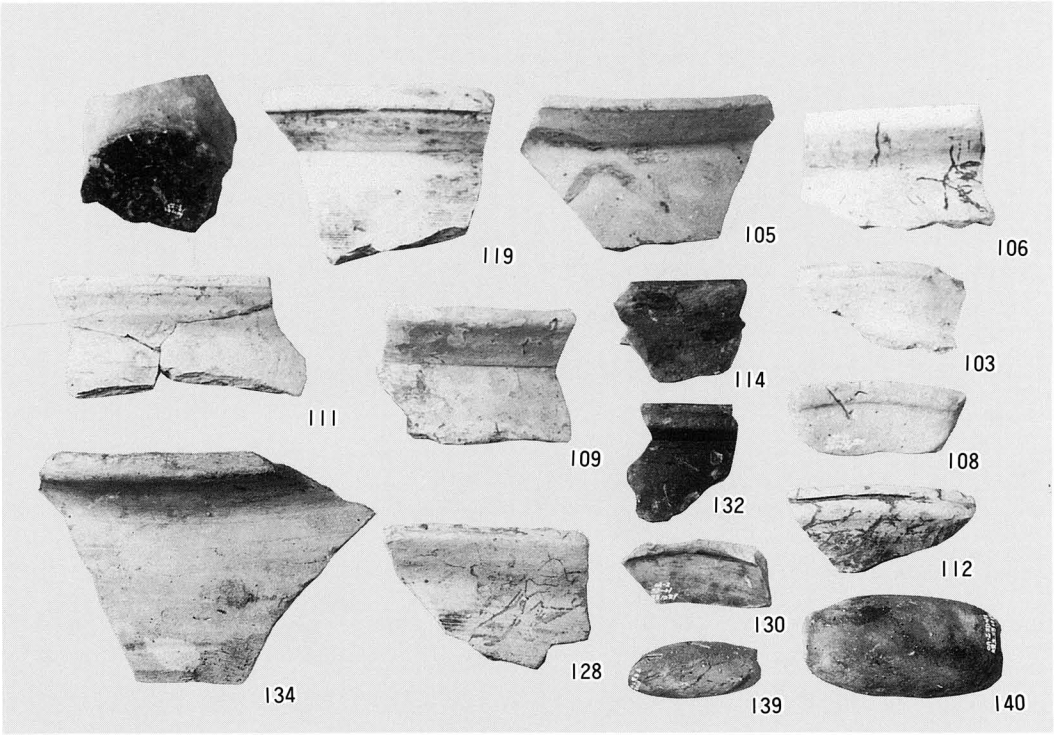
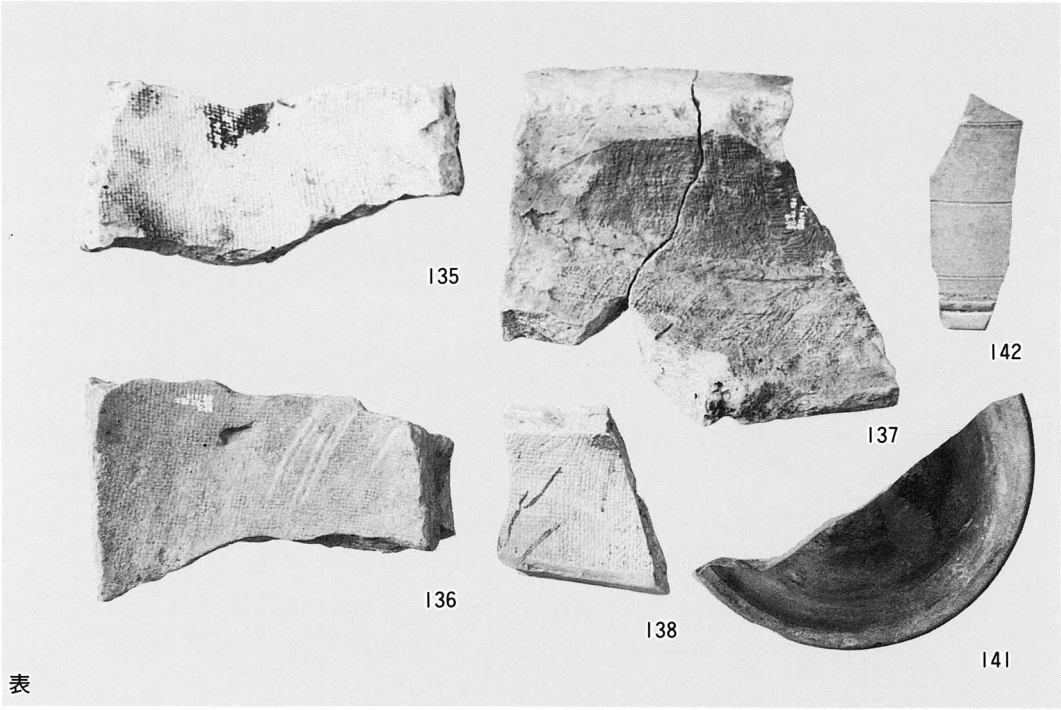
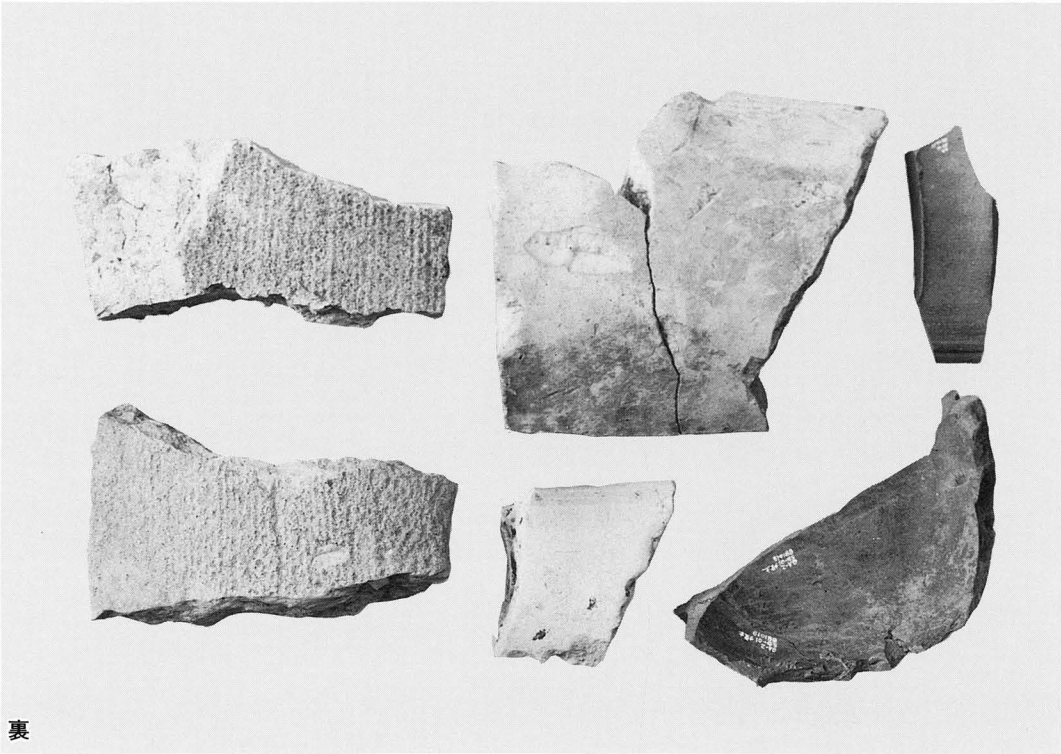

119
105
106
111
114
103
109
108
132
112
130
134
128
139
140

写真11　瓦・硯

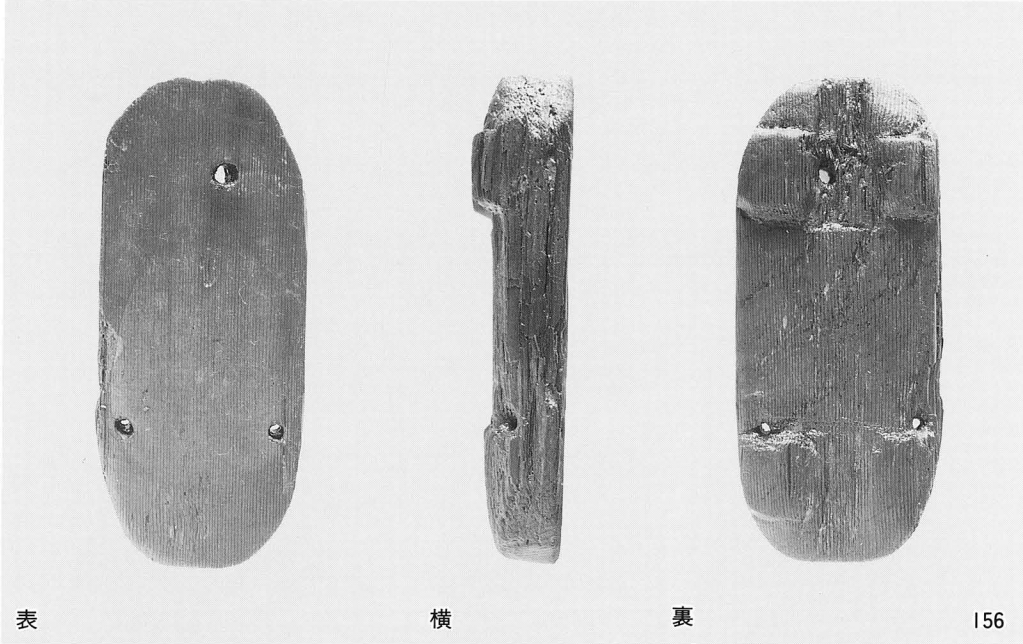


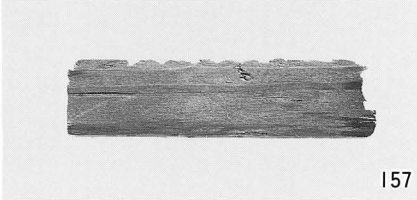
表



裏

写真12　木器





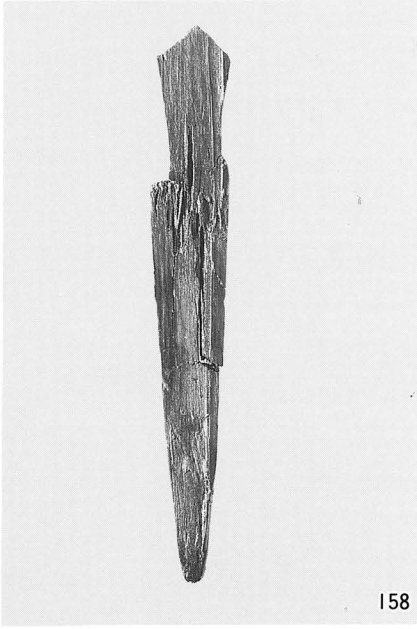
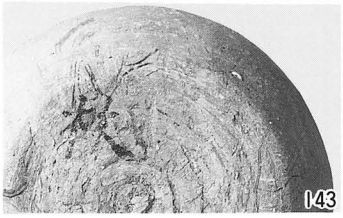
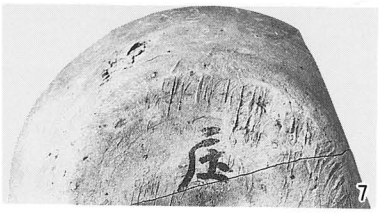
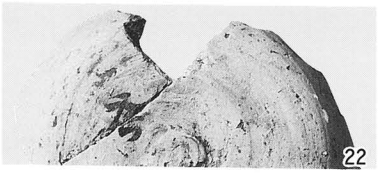
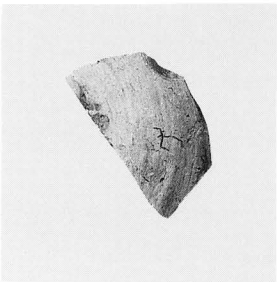


写真13　墨書土器









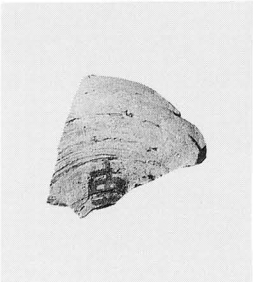
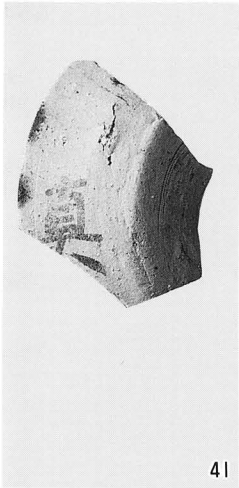


写真14　墨書土器


41

153

145

147

39

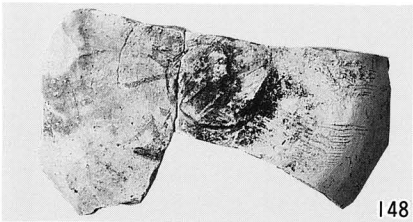
146

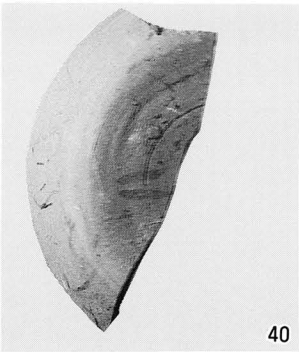
56

38

154

155


148


40

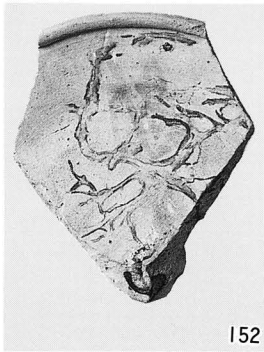
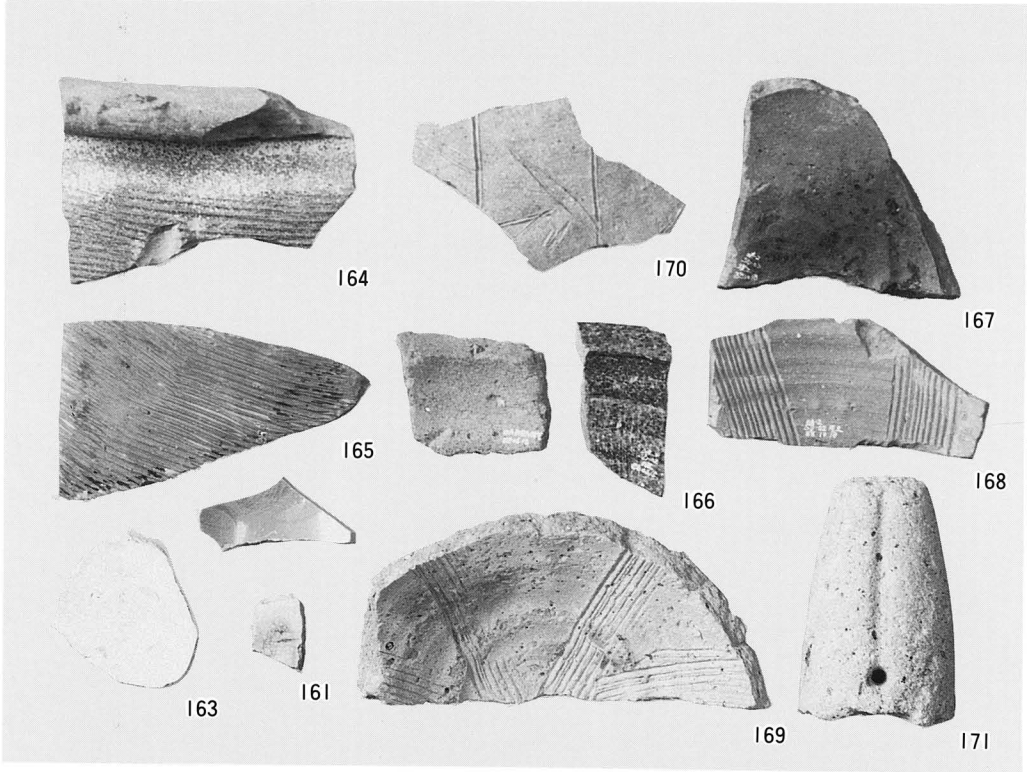
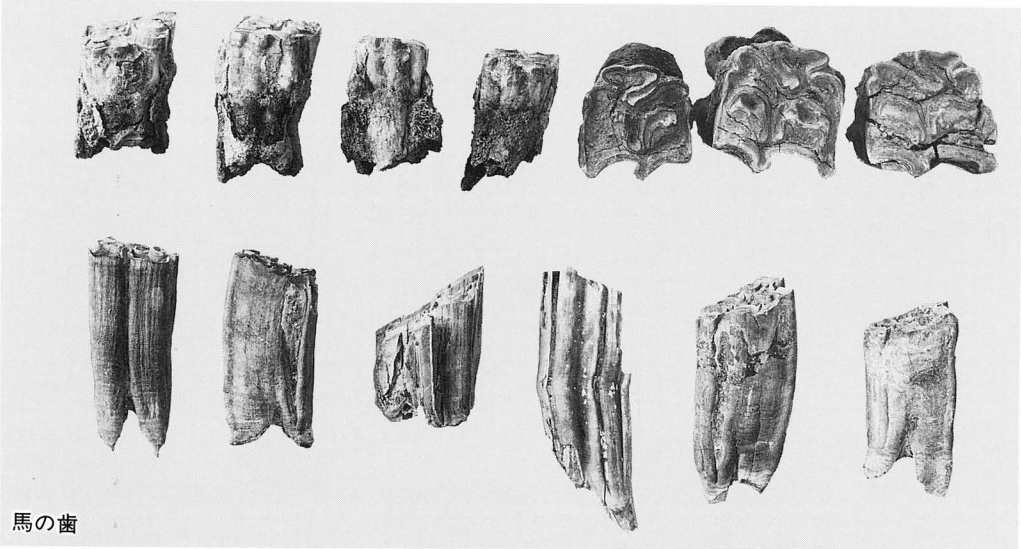
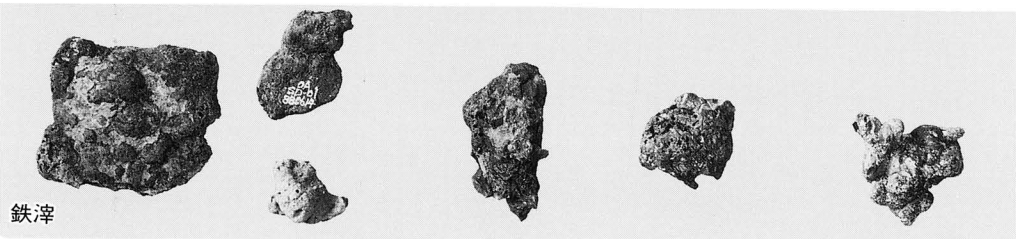

152

写真15　中世の遺物・歯・鉄滓





馬の歯



鉄滓

Ⅳ　まとめ

1.　ＳＤ０１の遺物の年代について

ＳＤ０１とその周辺から出土した遺物の特徴は次のとおりである。

1.　須恵器は、杯、高台杯、杯蓋、高杯、長頸瓶、横瓶、双耳瓶、短頸壺とその蓋、甕などの種類がある。数量的には供膳形態のものが９割以上を占め、貯蔵形態のものが１割程度である。杯と高台杯では、杯が８割近くあり高台杯は少ない。

　杯は、口径が11cmから13cm、高さが2.5cmから3.8cmのものがあり、高さが３cmを越えるものと越えないものにわけてみると、前者（杯Ａ類）は底部が丸味をもち不安定なのに対し、後者（杯Ｂ類）は底部がやや平坦で安定している。

　杯・高台杯・杯蓋には、「林」「庄」「東」「大」「中」「真」「一」「二」その他の墨書土器があり、また「一」の箆書土器がある。杯には内外面に漆を塗ったとみられるものがある。

2.　土師器は、椀、有台椀（皿か）、蓋、甕、鍋などの種類がある。数量的には供膳形態のものが４割近く、煮沸形態のものが６割を越える。

　椀は、口径10.5cmから19.4cm、高さは3.7cmから7.4cmで、体部が内湾ぎみに立つものと、やや外へ開くものがある。底部外面は回転糸切りのものとヘラケズリのものが半々で、いずれにも内面を黒色にするものがある。椀や蓋には赤彩するものがある。

　甕、鍋の口縁部形態は、口縁端部が角ばるもの、三角形に尖るもの、内側に段をもって立つものなどに区分できる。

3.　その他の遺物としては、平瓦、丸瓦、土錘、円面硯、下駄、斎串、編板、機織具の腰当てなどの木器、鉄滓、炉壁、馬の歯などがある。瓦は、国分寺跡など越中国府関連遺跡から出土するものとよく似ている。

　また、漆容器とした須恵器長頸瓶、杯、土師器椀、転用硯とした須恵器杯、杯蓋などがある。

4.　以上の遺物は、ＳＤ０１とその周辺約20m²の狭い範囲の厚さ20～30cmの黒色土中から出土した一括遺物である。須恵器杯、杯蓋などは完形品があり、ある時期にまとめて廃棄された可能性が高い。

須恵器と土師器について、県内外の出土資料に類例を求めその年代について考えてみたい。

須恵器杯についてみると、杯Ａ類は小杉町石太郎Ｆ窯跡、杯Ｂ類は小杉町南太閤山Ⅱ遺跡のものに近い様相とみる。池野正男氏は、石太郎Ｆ窯を８世紀第３四半期、南太閤山Ⅱ遺跡を８世紀第４四半期に位置づけている〔池野1987〕

石川県では、金沢市浅川３号窯跡と末２号窯跡のものに近い様相とみることができる。出越茂和氏は、浅川３号窯を平城宮Ⅲ期（750 年頃８世紀第３四半期）に末２号窯をその後につづく第４四半期に位置づけている〔出越1989〕

須恵器については、８世紀第３四半期から第４四半期に位置することができる。

吉岡康暢氏の奈良平安時代の土器編年では、８世紀後半期はII期に位置づけられ、さらに２小期にわけられている。土師器については、三浦中層遺跡と砺波市高沢島II遺跡の資料があてられている。〔吉岡1983〕

三浦中層遺跡の土師器供膳形態は、一群の赤彩土器と底外面から底側面へかけて轆轤削り調整を施した赤彩黒色土器椀片より構成される。赤彩土器の種類は、蓋、有台杯、盌、有台椀、盤、有台盤、高杯など多様である。それに対し、８世紀末に位置づけされる高沢島II遺跡では、黒色土器は椀と盤があり、底部は外面に回転糸切りのあるものがある。有台の椀はみられない。

ＳＤ０１のものは、赤彩黒色土器などは三浦中層遺跡に近いが、底部外面回転糸切りのものがあること、黒色土器が一定量あることなど高沢島II遺跡にも近い。

甕、鍋の口縁部形態をみると、三浦中層出土土器は、角ばるもの、三角形状のものもあるが、内側に段をもって立つものが結構多い。高沢島II遺跡出土土器は三角形状のもの、段をもって立つものが目につく。

それに対して、ＳＤ０１のものは、角ばるもの、三角形状のものがやや多いようであり、高沢島II遺跡のものより一段階古い様相を示していると思われる。

奈良県平城宮跡出土の土器についてみてみたい。

西弘海氏により、奈良時代後半期については、平城宮III、IV、Vの３段階の時期設定が行なわれ、紀年木簡の伴出により、それぞれの年代が、それぞれ750年頃、765年頃、780年頃に推定されている。〔西1976〕

その特徴についてみると、須恵器は、奈良時代前半期の平城宮Ｉ～IIIでは、高台の付かない杯が、高台杯よりその比率が多いが、IV以降では高台杯が多くなること。III～Vにかけて杯類の法量が小さくなり、大型品が少なくなること。杯、皿類の中では、土師器の量が増え、須恵器のものが少なくなることなどが指摘されている。

ＳＤ０１の須恵器杯は、高台の付かないものは高台杯より多いが、高台の付かない杯についてみると口径が11.5～12.5cmと小型のものが多く、15cmを越えるものはみられず、法量差による種類は多くない。

土師器椀は、口径が10.5～13cmの小型のものと16cm、19cmの大型のものがあるが、大型品を含むことではIII・IVに、小型のものの法量ではVのものに近い。

土師器甕、鍋の口縁部形態では、平城宮III～Vのものには、端部が角ばるもの、尖るもの、内側に段をもって立つものがあるが、段をもって立つものでも、IIIのものに比べ、内屈ぎみに立ち、三角形に尖るタイプのものに近いように思われる。

平城宮出土土器による時期区分にあわせるとすれば、V期ぐらいにあてておくのが適当ではないかと思われる。そうであれば、高沢島II遺跡はその後のVI期ということになろうか。

2. ＳＤ０１の遺物の性格について

遺跡の性格について少し考えてみたい。300 m²の狭い範囲で溝１条の調査で性格を云々することはむずかしい。しかし、出土遺物の中に瓦を含み、多数の墨書土器の中に「庄」を書くものがあることは、一般集落とは異なる性格をもつものと考えなければならない。

「庄」の墨書土器は、入善町じょうべのま遺跡で「西庄」が、金沢市藤江Ａ遺跡で「石田庄」が、金沢市畝田・無量寺遺跡で西念、南新保遺跡で「庄人」、金石東遺跡で「庄」、羽咋市長者川Ｄ遺跡で「庄」が出土している。じょうべのま遺跡・藤江Ａ遺跡などは庄園の庄家跡と推定されている。

本遺跡は瓦が伴うことも考え合わせると、庄園の庄家に関わる遺物の可能性は高いものと考えられる。

「東」の墨書土器については、この地域が鎌倉時代には、東条保と呼ばれ、九条家領荘園、東福寺領所であったこととの関係で注目される。久保尚文氏によれば、保の多くはもとは国衙領であったといわれ、平安時代以前、奈良時代には東大寺領荘園として開発が始まっていた可能性が指摘されている。〔久保1982〕

奥田淳爾氏によれば、天平18年に越中国司として赴任してきた大伴家持の目的の一つに、東大寺の墾田地を占定することにあったとされる。〔奥田1976〕

東大寺領荘園については、正倉院に天平宝字３年（759）と神護景雲元年（767）の開田地図が残されているが、それには射水郡では須加、鳴戸、鹿田の三か所があるが、いずれも大島町域にに比定されてはいない。しかし、それ以外にも荘園が占定されていた可能性があり、史料に現われない荘園のひとつとみることができよう。

荒畑遺跡のある北高木、その南方の八塚の明治22年の地図や航空写真をみると、南北に走る区割がみられる。荘園に関係する地割の跡を示しているのであろうか。

ＳＤＯ１の遺物では、鉄滓、漆容器、斎串、馬の骨なども注目される。庄家では、鍛冶が行なわれ、漆器の生産といかないまでも多量に漆が使用されたことであろう。下駄、斎串、馬の骨は祭祀に関わる遺物である。

古代には、農耕儀礼の一環（雨乞い、豊穣祈願など）として、牛や馬を殺して水神にささげる犠牲馬（牛）の風習があった〔土肥1982〕本物ではないが、小杉町小杉丸山遺跡では土馬が、入善町じょうべのま遺跡では馬形が出土しており、本物のかわりに用いられたと考えられている。〔上野1988〕

歯の一部がＳＤ０１から出土しており、多くの歯や肋骨（切傷がある）、肩甲骨などはＳＤ０２からの出土であるが、ＳＤ０１とＳＤ０２が交差していることから、もともとはＳＤ０１に伴いＳＤ０２に攪乱されている可能性がある。下駄、斎串もこの祭祀に用いられた木器と考えられる。

ＳＤ０１の遺物が荘園の庄家に関わるものとみる時、庄家の場所はどこであろうか。

昭和60年の試掘調査では、ＳＤ０１の北側で奈良～平安時代の柱穴が発見されており、その場所の可能性が高い。そこは盛土され工場敷地となり資材置場となっている。

3. 中世の遺物・遺構について

ＳＤ０２、ＳＤ０３から出土した遺物の特徴は次のとおりである。

1. ＳＤ０２からは、珠洲すり鉢、壺、石錘が出土している。珠洲の特徴からその年代は14世紀（南北朝時代）に推定できる。

2. ＳＤ０３からは、土師質小皿、珠洲すり鉢、甕、中国製白磁皿が出土している。珠洲の特徴では14世紀代、白磁皿は15世紀代に推定できる。

ＳＤ０２の覆土はほぼ単層で、ＳＤ０３の下層がＳＤ０３の覆土と共通している。すなわち、開削の時期については同じであったかもしれないが、ＳＤ０２が早くに埋まり、ＳＤ０３は16世紀代まで機能していたものと考えられる。

溝の性格についてはよくわからない。ただ、西側 250ｍには中世に円徳寺という寺があったと伝える寺田ノ山という塚があったと言われ、南側には古屋敷という字名があり、西から南にかけての一帯に、14～15世紀代の集落があったのであろう。

今は 800ｍ南にある北高木集落は、中世にはこの地にあったが、悪疫がはやり全滅したため、近郷から人を集めて現在地で村を再興したと言い伝へられているという。

参　考　文　献

大島町教育委員会編1989　『大島町史』

古岡英明1982　「下村地域のあゆみ」『下村・加茂神社「稚児舞」調査報告書』　下村役場

富山県教育委員会1986『昭和60年度富山県埋蔵文化財調査一覧』

同　上　　1989『昭和63年度富山県埋蔵文化財センター年報』

吉岡康暢1976　「第四章　珠洲古窯跡　第二節　窯跡各説」『珠洲市史』１

同上　1983　『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会　石川考古学研究会

金子浩昌1984　『貝塚の獣骨の知識　人と動物とのかかわり』

北陸古瓦研究会編1987『北陸の古代寺院―その源流と古瓦』

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会編1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』

西弘海1976　「第Ｖ章考察２土器」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所

土肥孝1982「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』

奥田淳爾1976「第四章古代社会の諸相第一節東大寺の墾田地」『富山県史通史編Ⅰ原始・古代』富山県

池野正男1987　「射水丘陵における８世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号

出越茂和1989　「金沢における八～十世紀の食膳土器」『金沢市未窯跡群』金沢市教育委員会

同上　1983　『金沢市畝田・無量寺遺跡』　金沢市、金沢市教育委員会

富山県教育委員会1972　『富山県遺跡地図』

砺波市教育委員会1978　『富山県砺波市梅檀野遺跡群予備調査概要』

上野章1988　「辰年にちなんで」『富山県埋蔵文化財センター所報』第21号

富山県

大島町荒畑遺跡

発掘調査概要

発行日　平成３年３月31日
発行者　大島町教育委員会
編著者　富山県埋蔵文化財センター
印刷者　日興印刷㈱

写真16

基本層序